

にて心へし(第二)まはのすゝさといふは、眞麻の心なり、これ俊頼卿の歌に、よみて侍る、まそはの糸をくりかけてと侍るとよ、糸などの、みたれたるよふなり、(第三)ますうのすゝさとは、まことにすはうなり、といふ心なり、ますはうのすゝさといふへきを、こと葉を略したるなり、色深きすゝさの、名なるへし、證歌、越前名所色濱、西行、しほのまにますうの小貝ひろふとていろのはまとはいふにやあ
るらん

○まはゆき

源氏桐壺巻に云まはゆき人の御おぼへなり、又簪木巻に云、家の内にたらはぬ事など、はたなかめるまゝに、はぶかすまはゆきまで、もてかしの娘(まはゆき)の、まは目なり、はゆきとは、はつかしきなり、はつかしきは、羞明しきの義とす

○またく

源氏夕顔巻に云火のはのかにまたくきて、又拾遺愚艸に云荻をあめるこやの假寝のた、一風にまたくよひのともし火(またく)とは、瞬の字の訓なり、目叩くの義とす、燈火のまたくとは、焰の風にちらくするをいふ

○まよひ

十六夜日記に云こゝに夜深き霧のまよひに、たどりいてつ(まよひ)とは、雲霧などに、専らいへるを思へは、まのあたり目に遮るものにのみいふへきならん、惑ふと

いふこと、一つに心得て、路ふみまよふといふは、此頃の人の誤りにもあらず、されど、雲霧などに、まよふといふ例あらねば、其差別なかるへからず、路を誤りて踏みたかふは、心の惑ひなれば、必ずふみまよふと云ふへき理なりとねはゆ、潜夫云、迷は字走にかゝれば、路迷ふなどによく適へり、又惑は或心にして疑の義なり、譬へは不義なることをも義ならんと思ひ惑ふの義にして、迷と惑とは判然區別あるなり、惑ふへくもあらず

○まひろけすかた

枕艸紙に云硯とりよせ、墨こまやかにすりて、ことなしびにまかせてなごはあらず、心どゝめて、かくまひろけすかた、をかしう見ゆ(まひろけすかた)とは、衣裳などとりしまりなく、ひきひろけたる体をいふなり

○まいて

更科日記に云また隠より、足柄をこゆ、まいて山の中の恐しけなること、いはんかたなし(まいて)とは、増してを、音便にて、くづせるなり

○まめなる

古今集序に云まめなる所には、花薄はに出すへきことにもあらず(まめ)とは、眞實の字に當れり、わたなる心の反對と知るへし

○まにく

土佐日記に云かくて漕きゆくまに、うみの邊に留るひとも、遠くなりぬ○まに
くとは、字には隨意とかく、ところにより少々つゝの違ひはあれど、何々にした
かひてとか、なに／＼するまゝになどの意なりとす

○まらうと

土佐日記に云唐歌聲あけていひけり、やまと歌主人もまらうともいひあへりけり○
まらうとは、客をいふ、名義は稀人にて、偶々來る客のことなれど、移りては稀
れならぬ客人をもまらうといふに至りしなり

○まけわざ

紫式部日記に云はりまのかみ、碁のまけわざしける日○まけわざとは、碁に打ち負
けたる方より、人を發應するをいふなり

○まろかし

紫式部日記に云御たきもの合せ果て、人々にもくはらせ給ふ、まろかしいたる人々、
あまた集ひ居たり○まろかしとは、合香をまろめることなり

○まどろむ

後撰集に云まどろまぬものからかたてしかすかにうつゝにもあらぬ心地のみする、
又千載集に云うきことのみまどろむは知られてさむれは夢の心地こそすれ○まどろ
むとは、少眠なり、士清翁いふ目蕩(どら)けるの義なり

○まてかた

後撰集に云いせの海のあまのまてかたいとまなみなからへにける身をう恨むる○ま
てかたとは、萩原元克云、海人の汐くむに、たてふものにて荷ひ、諸手をうへて
肩をゆり、いとまなければ、左右肩(まてかた)の意なり、荷田翁もこれに同説なり

○まさる

金葉集に云玉くしけ二見の浦のかひしけみまさるにみゆる松の群立○まさるとは、
捕金をいふ、今の蒔繪とかくに同じ

○まひ

万葉集に云玉銚の道の神たちまひはせんわか思ふ君を懐かしみせよ○まひとは、幣
の義なり、人に贈る品なり、今まひなひと云ふも同じ、潜夫云古へは神に奉るは幣
なり、夫れより賽銭なる紙錢となり又遂に金錢となる、是れを賄賂といふ蓋し賄賂
を奉して無理を願ふ故か、されは、今の世も事あれば、其の人に金錢を納れて、
無理を願ふこと流行せるは、古への遺風といふへさか、潜夫は知らざるなり

○まゆにこもり

枕艸紙に云柳なとをかしきころさらなれ、それもまだまゆにこもりたるこそを
かしけれ○まゆにこもりとは、柳の芽の皮を被りて、未だ出ざるほどをいふなり

○まかり

拾遺集物名に云霞わけ今かりかへるものならば秋くる迄はこひや渡らん○まかりとは菓子類にして、俗にぼうるといふもの類なり、和名抄に、糰餅、和名まかり、形藤葛の如きと見わたるこれなり

○まかぶがに

古今集に云さくら花ちりかひくもれ老らくのこんといふなる道まかぶがに○まがぶがにとは、まかぶやうにといふの意なり

○まてつがひ

新撰六帖に云梓弓まゆみはけふそまてつかひあやめの根さへ引きそへてけり○まてつかひとは、五月に左右近の馬場にて騎射あるなり、三日は左近、四日は右近、荒手結(つかひ)なり、五日は左近、六日は右近、真手結なり、真の手合せの義なり

○まみつらつき

狭衣物語に云宮すこしれきあかりて、みれこせ給へる、御まみつらつきなど、うつくしさ、花の匂ひ、藤のしなひにも、こよなく儂りて○まみとは目見にして、目つきを云ふ、つらつきとは、面貌にて、顔立ちの事を知るへし

○まかりまさし

十六夜日記に云東路思ひたちしあすどて、まかり申すの由すの由に、北白川殿へまかりしかど、見おさせたまはさりしかは○まかりまをしとは、罷申とかきて、俗に

暇乞といふに同じ

○まどあ

古今集に云思ふとちまどあむせるよは、綿た、まくをしさものにうわりける○まどあとは、團居(まどあ)にて、人の寄りあつまるをいふなり

○まうしふみ

枕艸紙に云雪ふりこほりなどしるに、まうしふみもてありく○まうしふみとは、申文とかきて、諸國の守介椽目などの、望みをまうす訴狀をいふ

○ませ

枕艸紙に云れまへはつはなれば、せんさいなとうる、ませゆひて、いとをかし○ませとは、籬とかきて、竹垣のことなり潜夫云是れも字の用を誤れり、ませとは、草木を新に植へ、其倒折を防ぐために立て添へて助けるものにして、援の字を用ゆ、又竿の字をも用ゆるなり、本項は竹籬の意とせり、其一考の價あるを知るへし

○またく

古今集に云らつしかとまたく心をはきにわけてあまの川原をけふやわたらん○またくとは、待つといふことを、のべていふ詞なり

○まねが

枕艸紙に云異所のものなれど、鶺鴒いとあはれなり、人のいふらん事をまねならん

よ○まねふとは、まねすることなり、學問といふも、故人の言行をみて、其まねをする譯なればまねふといふはこれに同じ

○まもらへ

枕艸紙に云説教師は顔よきつとまもらへたるこそ、ろの説くことのためとさもおはゆれ○まもらへとは、まもるを延へていふなり、まもるとは、顔をみつむることをいふ

○まつはれ

古今集に云よろにみてかへらん人に藤の花はひまつはれよ枝はをるとも○まつはれとは、字には纏とかきて、俗にもつれるといふか如し

○まゆねかく

万葉集に云いとまなく人のまゆねをいたつらにかゝしめつ、もあはぬ妹かな○まゆねかくとは、人に懸らるれば、眉の痒さといふ諺あるなり

○まほろし

金葉集に云心ころ世をは捨しかまほろしの姿も人にわすられにけり、又源氏桐壺巻に云尋ねゆくまほろしもかなつてにてもたまのありかをそことしるへく○まほろしとは、夢の如く影の如きをいふ、又幻術方士をいへり

○まささき

万葉集に云わか命まささきくあらはまたもみんしかの大津によする白なみ、又同集に云まささきてまたかへりみんますらをの手にまさもたるとものうらわを○まささきとは、幸くなり、まは發語さいはひにて、無事息災といふに同じ

○まほ

源氏早蕨巻に云しなてるやにはの湖にこく舟のまほならね共逢ひみしものを、又千載集に云そなれ木のろなれくしてむす昔のまほならずとも逢みてしかな○まほとは、眞顔なり、正面をいふなり

○まつをさます

枕艸紙に云どのもの官人などの、なかき松を高くともして○まつをさますとは、松明(たいまつ)をさますをいふなり

○まろね

万葉集に云わさもこがわをしのふらし草枕旅のまろねに下紐とけぬ、又夫木抄に云春山のさゝやの床のまろふしにとりのねきこゆわけぬこのよは、まろねとは、帶紐をとかすにねるなり、獨り寐をいふ、又まろぶしともいへり

け之部

○けうとま

徒然艸に云からはけふとま山の中にたさめて、さるへき日はかりまうてつゝ見れば

○けうとさとは、氣疎と書けり、ねろろしき義なり

○けにこし

古今集物名に云うちつけにこしとや花の色をみん白露のそひるはかりを○けにこしとは、牽牛子の字音にして、蔓生草なる、朝顔なり、此歌は上の二語中に、四字をかくしたるなり、潜夫云、けんこしといふより、無識者牽牛子とかくものあり、牛の字をことよひは、牛旁を、こほうといふか如し、あやしむにたらず

○げあかり

紫式部日記に云いさゝか身じろさもせられず、げあかりて、ものぞれはねぬや○けあかりとは、上衝とかきて、俗に氣ののはすといふことなり

○けいめい

徒然艸に云せうとの城介義景、其日のけいめいして候けるか○けいめいとは、遊仙窟には婆煩とかけり、茲にては、經營とかくへし、源氏夕顔巻に、けいめいとあるを、源語類聚に、敬命とかけり、うやまひしたかふの義なり

○けうある人

枕艸紙に云いみじうけうある人にて、遠き處には更に住ませし、一日に一度みではあるまじとて○けうある人の、けうとは、孝の字の音けに通したるなり

○けはれ

徒然艸に云ことにうちとけぬへされりふしそ、けはれなくひきつくるはまほしき○けはれとは、褻暎とかく、けとは、なれたる義なり、はれとは、法禮の義なり、又けはれを、私公ともかけり、常にさる物をけころもといひ、朝服禮服をはれさぬといふ

○けにく

枕艸紙に云まいて五つ六つなどは、たゝ覺ぬよしを啓すへけれど、さやはけにく、仰せことを、はへなくもてなすへさといひ、朽惜しかるもをかし○けにくとは、字には氣悪とかきて、けしきの悪しきをいふなり

○けおろし

更科日記に云思ひなしさへ、けおそろしく○けれそろしとは、俗にさみのわるいといふと全く同意にして、氣畏の義なりとす

○けちかく

更科日記に云聲すへて似るものもなく、空にすみのほりて、めてたく歌をうたふ人々、いみしうあはれかりて、けちかくて、人々もて興するに○けちかくとは、氣近くとかきて、人氣近くといふ意なり、人氣近くとは、其人に膝を接するといふか如し

○けうら

枕艸紙に云櫻の直衣いみしくはなくと、うらの色つやなど、ねもいはすけうら○

けうらとは、清らかなるをいふ、きよらより轉したるなり

○けしきはかり

枕艸紙に云細櫃の蓋に入れ、紙などにけしきはかり包みて○けしきはかりとは、景色計りとかけり、ものゝ少なきをいふなり

○けだし

万葉集に云古へにこふらん鳥は郭公けたしやなきしわかこふること、又同集に云山守はけたしありともわきもこかゆひけんしめを人とかめやも○けたしとは、蓋の字をかけり、もしといふに近し、潜夫云蓋の字の訓けたしとは、けりたすの意にして、是れより更に意味を支出する所にをくとは、古人の説なれども、蓋の字の本義はしからず、蔽ひ籠むるの義にして、又蔽を去るの意となり、決定の所に置く字なり、それといふものはと解してよし、是れ古訓の失といふへし、此類比々としてあるなり

○けしきある

更科日記に云こ、はけしきある所なめり、又同日記に云幸うして、明けたつ程にみれば、盗人の家なり、主しの女けしきある事をしてなんありけるといふ○こゝのけしきあるとは、怪しきの意にして、けしからぬといふにねなし、けしからぬといふを、けしきあるといふは、反對なれど、互に同じ意に用ひなれて、今はあやしむ人

もなし、さて上のけしきあるといふ詞は、怪しき事あるをいふの意なり

○けりく

紫式部日記に云けろくなとゆゑくしくて○けそくとは華足とかきて、物を盛る一種の机をいふなり

○けに

古今集に云夕されは螢よりけにもゆれともひかりみねはや人のつれなき○けにとは、勝るの意にして、螢よりもまどりて燃ゆる思ひといふなり

○けはひ

徒然艸に云人のほど、心はへなどはもの云ひたるけはひにこそ、物こしにもしらるれ○此詞は氣の一言にありて、はひとは助辭なり、字にうつさは形勢の字適するならん

○けつ

躬恒集に云下にのみもぬ渡れとも打はへて我かたもひをはけつ人もなし○けつとは、字には消とかきて、けすのすを、つにかねたるなり

○けさやか

更科日記に云夕日げさやかに、さしたるに、京の方も残りなくみやらる○けさやかとは、氣清にして、俗にはつさりと見ゆるなどいふか如し

○けんぞう

更科日記に云道けんろうならぬさきにと夜深う出しかは、又枕艸紙に云われはたろ、けろうにと云へは○けんそうもけそうも同じ、共に顯證の字音にして、物のあらはなるをいふ

○げらう

枕艸紙に云顔もいとげらうなれども、世にやんごとなきものに思はれ○げらうとは、龍とて、年末に神を祭るの名なり、故に藤の數積りて、事に熟練せるものを、上らうといひ、藤淺きものを下らうといふ、俗に新參といふか如し

○げす

更科日記に云いと怪しげなる、げすの小家なんあるといふに○げすとは、元は下衆の義にして、上衆の反對なり、源氏桐壺卷に、いとじやうすめかしくとあるは、桐壺の更衣の人柄の上衆なるをいへり、畢竟上衆は上等の人物にして、下衆は下等の人物をいへるなり

○けづりごし

枕艸紙に云つとめておんけつりくしにまわり、御てうつまわりて○けづりくしとは、梳櫛とかきて、御櫛をあぐることなり、潜夫云くしけづるの意なり

○げんざ

枕草紙に云げんざの物怪調すとて、いみしうしたりかはに○げんざとは、修験者の字音の轉したるものなり、是れ山伏をいふ、又道士ともいへり、佛の一派なりしか、明治維新のとき廢せられておどかたもなし

○け、れなく

古今集に云かひかねをさやにもみしかけ、れなくよこほりふせるさやの中山○け、れなくとは、心なくといふに同じ、甲斐の國の方言なり

○けやけく

徒然艸に云なべて心やはらかに情あるゆゑに、人の云ふほどのこと、けやけくいなみがたくて○けやけくとは、字には尤とかきて、甚しきの義なりとす

ふ・之・部

○ふついか

徒然艸に云不幸に愁にしつめる人のかしらおろしなど、ふつゝかに思ひとりたるにはわらて○鉄槌に云いやしき意なり、又不束とかきて、おろかの義ともなるなり

○ふやのはかせ

紫式部日記に云ふやのはかせさかしたち居たり○ふやのはかせとは、文室の博士にして、大學寮の博士をいふ

○ふまきすぢひ

徒然艸に云笛をねならず吹すさひたる、哀れときしるへき人もわらしと思ふに○ふさすさひとは、手すさみ、口すさみの類なり、又吹やむ義もあり、又すさひに、めつると、たゆむとの両義もありとす

○ふりみふらすみ

十六夜日記に云頃は三冬立つ始めのさためなき、そらなれば、ふりみふらすみ、時もたぬす○ふりみふらすみとは、降るかと思はれは止み、止むかと思はれは降るといふ意なり

○ふたがり

狭衣物語に云例の胸ふたかりまさりて、つくくどまほらせ給ふ○ふたかりとは、塞の字をかき、ふさかりの、さの字をたにかへたるなり、夫れは消(けす)をけつといふと同じことにて、五十韻横行のかよひといふなり

○ふりさけ

土佐日記に云あをうなばらふりさけ見れば春日なる三笠の山に出し月かも○ふりさけとは、遠き所、又は高さ山などを眺望する時は、我身をうしろへ、ろらして、必ず望まるゝものなり、畢竟身をさくるより、さけといふなり

○ぶり

古今集に云あふみふり○此ふりとは、風俗にして、近江の國の風俗歌をいふなり、

此歌の下に、みつくさふり、しはつやまふり、などあり、皆同じ意とす

○ふつくゑ

方丈記に云東の垣に窓を開けて、こゝにふつくゑを出せり、枕の方にすひつわり○ふつくゑとは、文机の約言なり

○ふりいつる

更科日記に云其日しも京をふりいて、ゆかんもいとものくるはしく○ふりいつるのふりは、助辭にして、語勢を強めたるのみ、只出るといふに變ることなし

○ふすぶる

古今集に云夏なれば宿にふすぶる蚊遣火のいつまでわか身下もねにせん○ふすぶるとは、俗にいふらすといふ、今も本文の如くいへる所もあり

○ふゆこもり

古今集に云ふゆこもり思ひかけぬを木の間より花とみるまで雪ふりける○ふゆこもりとは、諸木冬枯れて芽もせず、枝にこもる頃といふなり

○ふくらか

枕艸紙に云五つ六つはかりなるか、髪を頸のもとにかいくみて、つらいと赤うぶくらかなる○ふくらかとは、肥へふとりたるささをいふなり

○ふせこ

拾遺員外上に定家の歌に云打匂ふふせこの下の埋火に春の心やまつ通ふらん○ふせ
ことは、竹にて籠を造り、紙を張りて、所々に穴をあけたるものなり、中に火桶を入
れ、衣服のしめりを取り焚物の香をしむる者なり

○ふねのはて

土佐日記に云追風の吹きぬる時は行く舟の帆手うちてころ嬉しかりけれ○ふねのは
てとは、舟の帆足とて、帆に付きたる綱なり、はてといふより、手をうつといふ詞
へ、いひかけたるなり

○ふるさと

古今集に云故里となりにし奈良の都にも色はかはらす花は咲きけり○此故さと、
は、古き都をいふなり、人の住み捨てふるしたる昔しの都なり

○ふしつけ

拾遺集に云ふしつけし淀のわたりを今朝見ればとけんどもなく氷りしにけり、又千
載集に云いつみ川水のみわたのふしつけに岩間に氷る冬は來にけり○ふしつけと
は、柴漬なり、和名抄には縣の字に訓せり、柴を水中に沈めて、魚をこもらして捕
ふる仕掛なり、ふしとは、柴の字の古訓にして、神代記には、柴籬を、ふしかさと
よませり

○ふぢなみ

古今集に云我宿にさける藤なみ立かへりすきかてにのみ人のみるらん○此ふぢなみ
とは、藤靡きの約まれるなり、浪に似たる故なりなどいふは、ひかことなり

○ふぢころも

古今集に云はにも出ぬ山田をもると藤衣稻葉の露にぬれぬ日はなし○藤ころもとは
紫藤の皮を以て織りたる衣にして、乃ち賤者の服なり

○ふくため

枕艸紙に云あやしくれろさと待つほどに、ありつるふみの結ひたるも、たてふみも
いとさたなけにもちなし、ふくためて○ふくためとは、皺などつけて、ふくらした
るなり

○ふり

枕艸紙に云ふりにかきたるちどの顔、雀の子のねすなきするに、をとりくる○ふり
とは、瓜の轉語なり、これは姫瓜のことなるへし

○ぶたう

枕艸紙に云くすたまを、皇子たち、上達部などの立ちなみ給へるに奉るもいみしう
なまめかし、とりて腰にひきつけて、ぶたうし拜し給ふもいとをかし○ぶたうとは
舞踏の字音にして、御禮を申し上る作法なりとす

○ふるくしき

◎國文學資料 ○ふ之部

枕艸紙に云今少し見所あり、をかしかりぬへきに、いとさだすぎ、ふるくしき人の○ふるくしきとは、年をとりて、ふるびたる人をいふなり

○ぶつぐのおろし
枕艸紙に云二日はかりありて、椽のもとに怪しきもの、聲にて、なほろのぶつぐのおろしはべりなんといへは、いかてまださにはと答ふるを、何のいふにかあらんと立出て見れば○ぶつぐのおろしとは、佛の供物のさがりものことなり

○ふんで
枕艸紙に云ふんで紙給はりたれば、九品蓮臺の中には、下品といふども、書きて参らせられたは○ふんでとは、筆のことにて、筆はもと文手(ふみて)の義なり

○ふんじ
枕艸紙に云紫の紙に包みて、ふんじて、房ながき藤につけたるもいとをかし○ふんじとは、封の字音の延ひたるなり

○ふきがたり
枕艸紙に云かゝることなどを自ら云ふは、ふきがたりにもあり、又君の御ためにも軽々しう○ふきがたりとは、耽り語をかきて、俗にれのが田へ水を引くといふに同じし

こ 之 部

○ことくさ

徒然艸に云むかしの人はいかにいひすてたることくさも、みないみしくさこゆるにや○ことくさとは言雑とかくなり、俗にいひくさといふに同じ

○こたち

枕艸紙に云こたちなど、蓋にもものふり、やのさまも、たかうけとははけれど、すゝろにをかしようおほゆ○こたちとは、木立にて、庭の植込みをいふなり

○こりつか

徒然艸に云れはくに見くるしからぬは、文車の文、こり塚のちり○こりつかとは、塵塚とかきて、ちりをすつる處なりとす

○こりすま

古今集に云こりすまに又もなき名はたちぬへし人にくからぬよにしすまへは○こりすまとは、俗にこりすまといふか如し

○こころはへ

更科日記に云いふにしたかひて、出し立る心はへもめはれなり○こころはへとは、俗にさまへといふに同じ

○こよひるやすまいはぬへかめる

徒然艸に云御供の人はそくくといへは、こよひるやすまいはぬへかめるとうち

さくめくも○こよひうやすさいはぬへかめるとは、こよひはこゝろやすくぬへきなりといふて、内衆どものさくめくなり

○こゝろいられ

枕艸紙に云あまみやせからめきたるは、こゝろいられたらんとおしはからる○こゝろいられとは、俗にかんしやくもちといひ、氣短き人をいふ

○ことゝもり

枕艸紙に云耳を傾けて問ふに、少しことゝもりする人のいみしう繕ひ、めてたしと聞かせんと思ひければ、ぬも云ひ續けす○ことゝもりとは、瘧をいふ、潜夫云、豫讓の傳に炭をのみて瘧となるとあり、本項は俗にともりといふものならん

○こたま

徒然艸に云狐ふくろふやうの物も、人けにせかれぬは、所むかほにいりすみ、こたまなどいふけしからぬかたちもあらはるゝ物なり○鉄槌に云こたま、山彦、木神、空谷響、樹神、和名抄第二に云文選、蕪城の賦に木魅、山鬼、今案するに木魅は即樹神なり、和名古太万、はげ物の類なり、潜夫云、こたまとは反響をいふなり、形体あるものにあらざるなり、本項奇怪の解説をあくるものは、古人の語を存するに外ならざるなり

○こやのかね

紫式部日記に云こやのかね打驚かし、五段の御修法時はしめつ○こやのかねとは、字にて後夜鐘とかきて、曉の鐘にて、僧の謹行に打つなり、午夜とあやまりやすし

○こひち

更科日記に云今は武藏の國になりぬ、特にをかしき處もみぬす、濱も砂子白くなどもなく、こひちのやうにて○こひちとは、泥土のことにして、俗にどろといふに同し

○こゝろは

紫式部日記に云箱一よろひに薰物入れて、こゝろは梅の枝をして、挑み聞たり○こゝろはとは、冠の前にさす飾りなり

○こぢたう

狭衣物語に云こぢたうたうたうなはりたる、すろのろさすゑ○こぢたうとは、凡て物の茂く煩らはしきことをいへるも、此こぢたくと、同言なり、鈴屋翁は、言痛の意なりといへるか、夫れにては、當らぬ處多し、扱てこぢたう、又こぢたくの、たうたうは、目出度の度の字にして、斯く解すれば、何所にも當らぬはなきなり

○こよなく

更科日記に云今日はかくておはすれば、内外人おほく、こよなくにきは、しくも、なりたるかな○こよなくとは、俗にここのはかといふに同し

○こゝも

徒然艸に云大踏みたるころ、祭みたるにてはあれ、かの棧敷の前を、こゝらゆきかふ人のみしれるか、此詞は、古言に、こゝたく、こゝはく、などいへると同言にて、物の數多きにいふ、此本文にては、加茂祭りみんとて、人の限りもなく、ゆきかふさまをいへり

○こゝも

躬恒集に云さやかにもてれる月かな菊の花畫のこころ夜も見ぬにける○こゝは、字には如とかきて、如しの、しをはぶけるなり

○こゝも

枕艸紙に云ぬなかだちこころぎて、馬のかたかさたる、障子、網代、屏風、三稜草の簾など、特更に昔しの事を寫し出てたり○こゝろさとは、物を省略したるをいふ、そぐとは、略するの義なり、潜夫云ろぎとは、殺の字にして、略の字よりは猶重し、略は數あるものを減する意にして、殺は一つのをろさ小にするの意なり、同一に解しかたし

○こゝも

古今集に云やよやまてやま時鳥言傳ん我世の中にすみわひぬとよ○言傳(こゝつて)とは、音信を通するをいふなり

○こゝも

紫式部日記に云これろくでは、わろからんとの給はするにこゝつけて○こゝつてとは、かこづけてといふ意なり

○こゝも

古今集に云むらどりのたちにし我名今更にことなしふともしるしむらめや○ことなしふとは、事なまふりをする義にして、俗にしらぬふりするとらふに同じ

○こゝも

枕艸紙に云心とさめさするもの○心とさめさとは、物に驚るまで心中悸るをいふ、處によりては、とさめさ、とさめくなどいふ、方言あり古言の殘れるものなり

○こゝも

古今集に云わけぬとてかへる道にはこきたれて雨も涙もふりうはちつ○こきたれとは、こきおろすといふやうの形容の詞なり

○こゝも

古今集に云聲はして涙はみぬぬ時鳥我衣手のひつをからなん○こゝろもてとは、袖をいふなり、袖は衣の手なればなり、又袖も衣手(そで)の義にて相同し

○こゝも

枕艸紙に云こゝろもいと云ふもの、つひちの程に、ひさしびして居たるを、椽のもど

ちかく呼び寄せて○こもりとは、木守にて、御庭守りのことをいふなり

○ことのは

古今集序に云やまを歌は、人の心をたねとして、万の言のはとろなれりける○言のはとは、歌は言の端に顯はるゝ者なれば、うの端を艸木の葉によせて、心を種といふに照應させたるなり

○こにやく

拾遺集物名に云野邊みれば春めきにけり青つゝらこにやくまゝしわかたつむへく○こにやくとは、蒟蒻の字音にして、此根を掘りて食菜となす、俗にこんにやくといふなり

○ことらみ

十六夜日記に云ことらみしなから、涙のこはるゝを○ことらみとは、事忌みの義にして、俗に縁宜をいはいなからといふに同し

○こゝろつくし

十六夜日記に云又なかなすはよし、まれにもさく人ありけるころ、人わさしけるよと、心盡しに恨めしけれ○心つくしとは、俗に心配といふか如し

○ことだら

更科日記に云何となくつれづれに、心細くてあらんよりは、とめずをこたいのねや

は○こたいとは、古代の字音にて、俗に昔し堅氣といふに同し

○こゝろおこり

更科日記に云舟の櫂取りたる男ども、船を待つ人の數知らぬに、心おこりしたる氣色にて○心騒りとは、心の騒るにて、船に乗るへき人の多ければ、船頭の威張り居るよしなり、潜夫云騒とは、たかぶるの意なり

○こゝろのうら

古今集に云かくこひんものとは我も思ひにき心のうらうまろさしかりける○心のうらとは、心の占にて、心中に占ひとひしことの合ひしといふ意なり

○ことしのしたひ

万葉集に云琴とれば嘆きささきたつけたしくも琴のしたひにつまやこもれる○ことしのしたひとは、琴の腹のうつろをいふなり

○こつみ

万葉集に云秋風のちねのうらまのこつみなす心はよりぬ後はしらねと○こつみとは、字にて木積とかく、海岸に波にて打ちよせたる、塵芥をいふなり

○こゝろつから

古今集に云春風は花のあたりをよきてふけ心つからやうつろふと見ん、又後撰集に云風をたにまちてそ花のちりなまじ心つからに移るふかうさ○心つからとは、心か

らなり、自分の心からをいふなり

○こきませ

古今集に云見渡せば柳櫻をこきませて都を春の錦なりける○こきませとは、一に混するの意にして、もとは、賤の男か稻こく業などより云ひいたしたる詞なり

○こころゆき

竹取物語に云かくやひめの心ゆきはて、ありつる歌の返し、又狭衣物語に云物なとけによけにおこすれば、こころゆきはて、○此詞は、俗に氣か晴れるといふに同じく、心のなくさむに云へり、結ばれたる心をやるの意なり、潜夫云心をやるの意とあるは大ひに誤まれり、やるとは、人爲にかゝり、ゆきとは自然にかゝれり、決して同じくすへからず

○こころやり

万葉集に云忘れめや物語してこころやりすくれとすきす猶戀しくて○こころやりとは、心のむすほれをどくをいふ、我よりどくなり、どけるにはあらず

○ことねりあは

枕艸紙に云つしありく童女のはどくにつけては、いみじきわざしたると、常に袂をまもり、人に見くらべ、おも云はす興ありと思ひたるを、そばへたることをねりわらはなどに、ひきとられて、まなくもかし○ことねりわらはとは、小舎人童とかき

て、童子にて、車馬のことを、つかさどるものなり

○こえう

枕艸紙に云ひげこのをかしう染めたるを、五葉の枝につけたる○こえうとは、五葉の松をいふなり

○ことならは

後撰集に云ことならは折盡してん梅の花わか待つ人の來てもみなくに○ことならはとは、なるへきことならばといふ意なりと、古説皆然り

○ことならひ

紫式部日記に云例のことならひの、千年万年にて過ぬ○ことならひとは、ことば言なり、ならひは習慣にて、俗にいつものいひぐさの、千年万年で、其場をすますと

○こほめく

枕艸紙に云わしうわくれは、障子などもたをめかし、こほめくこそしるけれ○こほめくとは、源氏夕顔巻にも、からうすの音、こほくとあり、俗にころくとなる音をいふなり、こほめくの、めくは形容詞なり

○こしをれたる

紫式部日記に云空のけしきもうち騒きて、なんとてこしをれたることや、書させ

たりけん〇こしをれたることゝは、腰折とかきて、歌のあしきといふなり

〇こゝまだし

枕艸紙に云供なる男子とも、ひみしう笑ひつゝ、綱代をさへつさうがちつゝ、こゝまたしこゝまたしとさしあつむなり〇こゝまたしとは、こゝにまださゝぬ方ありといふ意なり

〇こまいぬ

枕艸紙に云みやはしめのさはうしく、こまいぬおはしやうじなど、もてまいりて〇こまぬとは、狛犬とかきて、一種の獸なり、其形を銅にて造り御簾の鎖に置くものなり、潜夫云余聞く神后の三韓を征するや高麗王、軍門に降る、其形甚だ陋し、神后曰く、三韓の王は、日本の犬の如しと、後世神前に獸像を置く、蓋し高麗犬といふ、外夷内服を表するなりと、果して然るや、潜夫今其出處を忘失し、明言するを得ざるなり

〇ことゝなる

枕艸紙に云ことゝなるもの〇此は、異事にて、そのとの常にかはりたるものをいふ

〇ころもをかへす

古今集に云いとせめてこひしき時はぬは玉のよるの衣をかへしてろさる〇ころもをかへすとは、夜の衣をかへしてぬれば、戀しき人の必らず夢にみゆといふ諺

の古へありしより、かくはよめるなり

〇こゝあくるし

枕艸紙に云思はん子の法師になしたらんこそは、いと心苦しけれ〇心くるしとは、俗に氣の毒といふに同じ

〇こひのむ

万葉集に云ぬさおきてわれはこひのむあさひかすたゝにむゆきてあまらしらしめ〇こひのむとは、祈禱をいふなり、神佛に祈り願ふをいふなり

〇こゝのへ

拾遺集に云をりてみるかひもあるかな梅の花けふ九重に匂ひ優りて、又詞花集に云古へのならの都の八重さくらけふ九重に匂ひぬる哉〇こゝのへとは、禁中をいふなり、楚辭に出つ、注に、天子の九門をいふ

ゑの部

〇えひなき

徒然艸に云あるは醉なきし、下さまの人はのりあひいさかひて、あさましくれろろし〇万葉集に、かしこしといふものよりも酒のみてぬひなきするをよしてあるらし又白樂天の詩に云誰か料らんや平生酒に狂するの客、如今變して酒悲の人と作らんとは

○あふくろ

枕艸紙に云装束をかしうしたるあふくろ抱かせて、小舎人童ども○あふくろとは、もとは鷹の餌を入れるものにて、袋といふも、竹にて製したるものなり、世俗に提籃といふものなり

○あひしれ

土佐日記に云廿四日、講師馬の餓しに出ませり、ありとある上下童まで酔しれ○あひしれとは、酔痴の義にして、酔ひたはれて、痴人(しれひと)のやうになるをいふ

○あせもの

枕艸紙に云別當など呼ひて、うちさゝめき物語しで出てぬる、あせものとは見ゆすかし○あせものとは、似て非なるものをいふ、俗になまさまものといふか如し

て 之 部

○てまくりて

伊勢物語に云てをくりてあひみしことをかそふれば十といひつ、四つはへにけり○此手を折りてとは、ゆひのことにして、指を折りて數ふるの義なり、決して腕を折傷せしことにはあらざるなり

○てうがく

枕艸紙に云りんじの祭りのでうかくなどは、いみしうをかし○てうがくとは、字には調樂とかきて、十一月午の日にけはる、御式なり、なほ調樂とは、舞樂の下ならしといふ

○てまさぐり

枕艸紙に云装束したる珠數、かいまさぐり、てまさぐりにして○てまさぐりとは、玩弄するをいふ、手にて常に探ることなり

○てけ

土佐日記に云かくあるを見つ、漕き行くまに、山も海も皆くれ、夜更けて、東西も見ゆすして、てけのこと、櫂取の心にまかせつ○てけとは、天氣の字音なり、日よりのことは、船頭の意に任すといふ義なり

○ていけ

土佐日記に云ていけのことにつけつ、いのる○ていけとは、天氣の字音の轉したるものにして、んをいと、かゝたり、潜夫云我國假名字の如きは、其字簡疎にして、漢字の如く、繁雜なるものにあらず、故に隨て失誤脱落しやすし、因て知る古語の省畧轉化などは、或は誤脱などに起り、後人強て説をなし、或は轉といひ、或は畧といふ、又笑ふへし、蓋し轉略に一定の法規なきを以て、之を證するに足らん、故に古語は其意義を得るを以て足れりとす、其理を求むるを要せず、之を求むるも其

理を得ざるもの多し

〇てこな

万葉集に云真間の手兒名は、れくつきとてこなとは、女の名とみゆるに、曾彌好忠集に云うつき原てこなか布をさらせると見ゆしは花の咲るなりけり、此歌を見れば、總て女兒をいふ事と聞ゆ、又或る人の説に、今も陸奥のあたりにては、末女のことを、てこなといへりと、末女の事と限りるせば、好忠の歌は心得られず、思ふに、末女は、父母の特に寵愛するものなれば、移りては、人のいみしうかしく女は、末の子ならでも、かくはいへるか、もしあらんには、好忠の歌も亦聞へぬにはあらざるなり

〇て

更科日記に云十日はかりありて、まかてたれば、ては、すひつに火などれこして待ち居たりけり、又紫式部日記に云宮の御前きこしめすや、かうまつれりと、ねれはめし給ひて、宮の御てゝにて、まろわろからず、まろか娘にて、宮わろくればしまるす〇てゝとは、父(ち)の誹語したるものなり

〇てうさ

更科日記に云ぬしたちてうと、とりたはさうせよやといふを〇てうとゝは、調度の字音にして、俗に道具といふに同じ、又多く食器をいふなり

〇てもすまに

万葉集に云てもすまに植しはきにやかへりては見れどもわかす心つくさん〇てもすまにとは、手のひまなきなり、鈴屋翁云、すまには、しはしはの意なりと

〇てをすりて

枕艸紙に云まことには、四日のゆふさり、侍共やりて、取捨てさせしぞかへりごと云ひあてたりしこそわかかりしか、其翁出来て、いみしう手をすりて云ひければ〇てをすりてとは、手を摺ることにて、迷惑かりたる体をいふなり

〇てうする

枕艸紙に云いたくわつらふ人にかゝりて、ものへけてうするも〇てうするとは、調伏の法を行ふことをいふなり

〇てつゝ

紫式部日記に云一といふ文字をたに、かきわたし侍らす、いとてつゝにあさましく侍り〇てつゝとは、手筒にて、俗に不調法、又ふさやうといふに同じ

〇てうはみ

枕艸紙に云てうはみにつゝとられたる〇てうはみとは、雙六をいふなり

〇てつがひ

枕艸紙に云馬場といふ處にて人多く騒ぐ、何事するぞと問へば、てつがひにて、ま

ゆみいるなり○てつかひとは、字にては手結どかきて、又手番ともかけり、二人一番と定めて、躬藝の優劣を争ふをいふなり

あ 之 部

○あたし野

徒然艸に云あたし野の露さゆる時なく○鉄槌に云名所にあらず、たゝあたなる心ばかりに、歌にも、よむる、證歌、たれどもとまるへさかはあたしの、草のはことにすかるしら露、又あたしの、はきの末こそ秋風にこほる、露や玉川のみつ、又云ふるさ歌枕に阿太志野は大和或は山城にありと、俊頼は玉川によみ合せり、玉川又何の名所とも知かたし、清輔は名所にのせたるを八雲抄に不審し給へり、ある歌合の判詞に、あたしの名たかゝらぬにや知人なし、又化野どかけり、承暦の歌合にさる野をすきて、あたしのまで行けんも、あちさなし

○あはめにくみ

源氏筆木卷に云式部をあはめにくみて、少しよろしからんことを申せ、とせめ給へと○古註多くは此あはめのはと、濁音によみ來れども、是れは非なり、河海抄に淡の字を、あはめとよめり、扱てあはめとは、此藤式部かまことしからぬことを、心にも入れすいふを、淡とし、疎み悪むさまをいふなり

○あかたな

徒然艸に云あか柵に菊紅葉など折ちらしたる、さすかに住人のあれば成へし○あかは字にかけは、闕伽にして、水の梵語なりとす、又阿伽ともかくなり

○あくか札

源氏真木柱卷に云御中もあくかれて波どへにけれと、又落久保物語に云御中はたゝあくかれにあくかる○小夜時雨に云あくかるは先達在所離と釋きたる意にて、在所を離れてゆく意なれば、身の家をはなれ、魂の身を離るゝ事などにいへり、さるを只焦るといふは、心の火に身の焦るといふ詞なれば、たゞ一つ詞のやうに思はひかことなり、又あこかるといふは、くこ迴音なれば相轉したるのみにて別の詞にあらず、凡て詞は時の移るにしたかひて、さまゝに轉するものなれば古書をよむには其心なかるへからず

○あはれなる

徒然艸に云ふみは文選のあはれなるまきゝ、白氏文集老子のことは南華のへん○あはれとは、哀れの意にあらず、あつはれのつを省きたるなり

○あなかま

土佐日記に云驚て見れば、いみしうをかしけなる猫あり、いつくよりさつる猫とみるに、あねなる人、あなかま、人に聞かすな○あなかまとは、禁止の詞にして、必ず騒ぎ立てなどして、人にさかすなど、制する意なり、あなとは、俗にあゝ、又

あらといふか如し、發語にして、かまとは、諱の字に當り、かまひすしといふの省約語なり

○あやめふところ

徒然艸に云五月あやめふく比、早苗とる比、水鶏のたゝくなど心ほそからぬかは○ふくは喜なり、檐におくゆへなり、天平十九年五月に勅ありて、百官諸人ことごとく菖蒲の葉をかくへしかけさらんものは宮中に入へからすと定めらる、又弘仁式に云五月三日、平旦に菖蒲よもき花など南殿の前にをく、又拾芥に云五月四日、主殿寮、内裏の殿舎に菖蒲を莒く、又事文類聚の前集に雲端午菖蒲を以て、或は縷にし或は屑にして酒に泛ふ

○ありき

源氏帚木卷に云されど、さるへさくまには、よくこそかくれありき給ふなれ、又古事記に云足はあるかねと○ありきとは字にて、歩行とかきぬ、古へはあるくといふ蓋し、り、る、相通なればなり、又童蒙頌韻には踏の字を、あるくと訓せり、此詞は本來足にてあるくのみ用ひたるも、うつりて、船にてゆくことにも用ゆるなり、竹取物語に云命死なはいか、はせん、いきてあらん限り、かくありきて、はうらいといふらん山にあふやと、海にこきた、よひありきて○茲にては只行の字の義にして、歩行の義にはあらざるなり

○あしのみす

徒然艸に云板敷をさけ、あしの御簾をかけて○あしのみすとは、忌服中に用ひらるゝものなり、瑤囊抄に云倚廬の御所は、いたしさをさけ、葦の御簾、布の木爪、太刀平緒、其外装束等皆非常也、一説にみすを翠簾とかき、布のもかうを、布の帽額と書けり、木爪は、ほけなり、もつかうとよめり、両説なり

○あからめもせず

徒然艸に云花の下にはねちより立より、あからめもせず廻りて○此詞は字にかけは不傍見なり、よそみもせぬの意なり

○あてはか

源氏若紫卷に云なつかしう、うちをよめくおとなひ、あてはかなりと聞玉ひて○あては貴なり、はかはるへといふ詞なり、淺きことを、あさはかといふの類なり

○あなかしこ

徒然艸に云しかくの事はあなかしこゝのためいひなることをなといへるこそ○あなかしこは、字には穴賢とかく、下學集に曰く、穴賢は、上古の時、倭漢兩國未だ家を知らず、人士粟に居る、恙虫人を螫す、故に本朝書札の末に相勸めて穴賢と曰ふ、言ふてゝろは土粟の穴賢く閉塞て恙虫を防く可しと、又無恙の字は戰國策に出たり、何事もなきかといはふ詞なり、然れば世俗の消息の末に穴賢と書は、其無

事なるをめてたしといふ心なるへし、書簡尺牘の書尾に、自齋、保齋、自愛、至祝、珍重など書かことし、又所によりて、穴かまへてといふ義もあるへし、余聞く、あなかしこの、あなとは、あら、あゝ、の意にして、發語の詞とし、かしことは、かしての意にして、畏れ謹むの義なり、恐惶、恐懼などに同じ、故に書末に之を置き先方を敬ふなりと、夫れ或は然らんか、以て茲に蛇足す

○あうら

万葉集に云月よにはかどに立いて夕けとひあうらをせしゆかまくをほり○あうらとは、足占なり、足の踏み敷にて吉凶を占ふをいふ

○あないせさせて

徒然艸に云おほしいつる所ありて、あないせさせていりたまひぬ、あれたる庭の露しけきに○あないせさせてとは、案内をさするなり、あないの、んを略きたり

○あけはり

枕艸紙に云内に入れれば、色々の錦のあけはりに御簾いと青くかけわたし、へいまんなど引きたる程、なへてたゝに此世と覺ぬす○あけはりとは帽額の類にて、俗に天幕といふ

○あしかなへ

徒然艸に云かたはらなるあしかなへをとりて、頭にかつきたれば、つまるやうにす

るを鼻をしひらめて○あしかなへとは、鼎の字を用ゆるなり、和名集説に曰く、三足兩耳、五味を和す、寶器なり、史記に云九州の金を取り九鼎を造る、世俗にいふ手とりなへの類なり、證歌、拾遺集に云つこのなにはわたりにつくる田はあしかなへかもねころ見わかぬ、潜夫云手とりなへの類といふは非なり、鍋は口大なり、義に就て考ふれば、茶釜鑪子の類ならんか

○あはら

方丈記に云庵の北に少地をしめ、あはらなる姫垣を圍ひて園とす○あはらとは、間踈の意にして、俗に荒々しきといふか如し、我家をひけして、あはらやなといへり

○あかきの水

徒然艸に云ありす川のわたりに水のなかれたる所にて、さい王丸御牛を追たりければ、あかきの水前板までさゝとかゝりけるを○あかきの水とは、足かきの水なり、牛の足にてかきわけたる水をいふ

○あふこ

古今集に云人こふる事をれもにどにないもてあふこなきこそわひしかりけり○あふことは、字にて逢期とかけり、此歌は、上のにないより受けて、あふこ(撥棒)とかよはせたるなり、今猶處により、あふこといへるあり、くこのかよひなり

○あわくをろうか

あらといふか如し、發語にして、かまとは、諱の字に當り、かまひすしといふの省約語なり

○あやめふくころ

徒然艸に云五月あやめふく比、早苗とる比、水鶏のたゝくなど心ほそからぬかは○ふくは昔なり、檐におくゆへなり、天平十九年五月に勅ありて、百官諸人ことごとく菖蒲の葉をかくへしかけさらんものは宮中に入へからすと定めらる、又弘仁式に云五月三日、平旦に菖蒲よもき花など南殿の前にをく、又拾芥に云五月四日、主殿寮、内裏の殿舎に菖蒲を葺く、又事文類聚の前集に雲端午菖蒲を以て、或は縷にし或は屑にして酒に泛ふ

○ありき

源氏帚木卷に云されど、さるへさくまには、よくこそかくれありき給ふなれ、又古事記に云足はあるかねと○ありきとは字にて、歩行とかきぬ、古へはあるくといふ蓋し、り、る、相通なればなり、又童蒙頌韻には踏の字を、あるくと訓せり、此詞は本來足にてあるくのみ用ひたるも、うつりて、船にてゆくことにも用ゆるなり、竹取物語に云命死なはいか、はせん、いきてあらん限り、かくありきて、ほうらいといふらん山にあふやと、海にこきたよひありきて○茲にては只行の字の義にして、歩行の義にはあらざるなり

○あしのみす

徒然艸に云板敷をさけ、あしの御簾をかけて○あしのみすとは、忌服中に用ひらるゝものなり、瑤囊抄に云倚廬の御所は、いたしきをさけ、葦の御簾、布の木爪、太刀平緒、其外装束等皆非常也、一説にみすを翠簾とかき、布のもかうを、布の帽額と書けり、木爪は、ほけなり、もつかうとよめり、兩説なり

○あからめもせず

徒然艸に云花の下にはねちより立より、あからめもせず廻りて○此詞は字にかけは不傍見なり、よそみもせぬの意なり

○あてはか

源氏若紫卷に云なつかしう、うちそよめくおとなひ、あてはかなりと聞玉ひて○あては貴なり、はかはるへといふ詞なり、淺きことを、あさはかといふの類なり

○あなかしこ

徒然艸に云しかくの事はあなかしこあとのためいひなることをなといへるこそ○あなかしこは、字には穴賢とかく、下學集に曰く、穴賢は、上古の時、倭漢兩國未だ家を知らず、人士窠に居る、恙虫人を螫す、故に本朝書札の末に相勸めて穴賢と曰ふ、言ふころは土窠の穴賢く閉塞て恙虫を防く可しと、又無恙の字は戰國策に出たり、何事もなきかといはふ詞なり、然れば世俗の消息の末に穴賢と書は、其無

事なるをめてたしといふ心なるへし、書簡尺牘の書尾に、自齋、保齋、自愛、至祝、珍重など書かことし、又所によりて、穴かまへてといふ義もあるへし、余聞く、あなかしこの、あなどは、あら、あゝ、の意にして、發語の詞とし、かしことは、かしこみの意にして、畏れ謹むの義なり、恐惶、恐懼などに同じ、故に書末に之を置き先方を敬ふなりと、夫れ或は然らんか、以て茲に蛇足す

○あうら

万葉集に云月よにはかどに立いて夕けとひあうらとをせしゆかまくをほり○あうらとは、足占なり、足の踏み敷にて吉凶を占ふをいふ

○あないせさせて

徒然艸に云おほしいつる所ありて、あないせさせていりたまひぬ、あれたる庭の露しけさに○あないせさせてとは、案内をさするなり、あんないの、んを略きたり

○あけはり

枕艸紙に云内に入ぬれば、色々の錦のあけはりに御簾いと青くかけわたし、へいまんなど引きたる程、なへてたゝに此世と覺ぬす○あけはりとは帽額の類にて、俗に天幕といふ

○あしかなへ

徒然艸に云かたはらなるあしかなへをとりて、頭にかつきたれば、つまるやうにす

るを鼻ををしひらめて○あしかなへとは、鼎の字を用ゆるなり、和名集説に曰く、三足兩耳、五味を和す、寶器なり、史記に云九州の金を取り九鼎を造る、世俗にいふ手とりなへの類なり、證歌、拾遺集に云つくのくにはわたりにつくる田はあしかなへかもねころ見わかぬ、潜夫云手とりなへの類といふは非なり、鍋は口大なり、義に就て考ふれば、茶釜鑪子の類ならんか

○あはら

方丈記に云庵の北に少地をしめ、あはらなる姫垣を圍ひて園とす○あはらとは、間疎の意にして、俗に荒々しきといふか如し、我家をひけして、あはらやなどいへり

○あかきの水

徒然艸に云ありす川のわたりに水のなかれたる所にて、さい王丸御牛を追たりければ、あかきの水前板までさゝどかゝりけるを○あかきの水とは、足かきの水なり、牛の足にてかきあけたる水をいふ

○あふこ

古今集に云人こふる事をれもにどにないもてあふこなきこそわひしかりけり○あふことは、字にて逢期とかけり、此歌は、上のにないより受けて、あふこ(撥棒)とかよはせたるなり、今猶處により、あふこといへるあり、くこのかよいな

○あわくさるうか

◎國文學資料 〇あ之部

徒然艸に云老ぬる人は精神おとろへ、あはくをろそかにして、感しうこく所なし○
鉄槌に云あはくをろろかとは、年よりては、精神衰へ、氣血淡薄にして、物に感動
することすくなし、然るに本項は、主として色をいふなれば、老人の色に淡疎なる
をいふなり、食欲財欲に至つては老人とゆへども益す深きあり淡疎といふへからさ
るなり

○あいなく

枕艸紙に云愛敬れくれたる人の顔など見ては、たどみにいふも、けにその色よりし
て、あいなく見ゆる○あいなくとは、無愛とかく、愛敬なきなり、又あぢきなきともな
ることあり

○あか佛

徒然艸に云此男をそらうたくして、あか佛とまもりわたらめ○あかはとけとは、吾
の字日本記に、あかとよめり、源氏手習の巻に、あかはとけ京に出給は、ころあ
め、又花鳥には、あかはとけは我佛なり

○あらはひ

大和物語に云かいせうと云ふ人、法師になりて山にすむ時に、あらはひなどする人
なかりければ○あらはひとは、衣を洗濯するをいふ、あらしを延入て、あらはひと
いふは、すまひを延て、すまはひといふと例なり

○あるしまうけ

徒然艸に云足利左馬入道の許へ先便をつかはして、立いられたりけるに、あるしま
うけられたりける様○あるしまうけとは、饗應とかけり、日本記にて饗の字を、み
あへとよめり、俗にもてなすとよむなり

○あふさきさ

古今集に云そへにととすればかゝりかくすればあないひしらすあふさきさるとは○
あふさきさとは、一方か善ければ、一方か悪しきといふ事なり

○あたら身

徒然艸に云かくあやしき身のために、あたら身をいたつらになさんやはと○惜の字
をかく、あたらしむとよめり

○あたらしき

新の字の意にわらす、矢張あたら身同語にして、あたらは、可惜にして、しきは、
敷なり、古は其差よくわかれとも今は相混せり

○あやしのいへ

枕艸紙に云まつりのかへさに、紫野のわたり近き、あやしの家とも○あやしのいへ
とは、茲にては、卑しき賤か家をいふなり、されど處によりては怪異の義となるこ
と多し

○あさらせ

茶式部日記に云かくし置きたるを、御前にあるほどに、やをらおはしまして、あさらせ給ひて○あさらせとは、あさるの働きにて、扱てあさるとは、搜索することはいふなり、字にては求食とかきて、本は鳥の餌を求むるより、出てたる語なりとす

○あけぐれ

枕艸紙に云あけぐれの程に歸るとて、雪何の山に満てるとうち誦したるは、いとをかしまものなり○あけぐれとは味爽と書きて、夜の明んとして、暫し味くなるをいふ

○あひひ

枕艸紙に云雨いたく降りて、つれくなりとて、殿上人うへのみ、局に召して御遊ひあり○あひひとは、茲にて舞樂のことをいふ、物語書などに、あそひ給ふなどあるは、十中に八九は、皆舞樂のこと、見て可なり

○あさひ

更科日記に云東西は海近くていと面白し、夕霧立ち渡りていみしうをかしければ、あさひなともす、あさひとは、朝寝なり、いといふは、寝ることゆへ、いぬる、又いぬる、ねられぬなともいへり、潜夫云いは、いぬの、ねを省略せしなり

○あま

更科日記に云さりとて、其有様の忽ちに、さらしくしきいきはひなど、あへいやうもなく○あまといとは、あまといとよみならへり、あまといの意なり

○あまつら

枕艸紙に云けつり氷のあまつらに入りて、あたらしかなまりに入りたる○あまつらとは、和名抄に、千歳藥、和名阿末豆良とあれども、今其物密かならず、或人云是れは俗にあま茶といひ、灌佛會のとき用ゆるものなりと、しはらく考を存す

○あさけ

万葉集に云秋立ていくかもあらねはこのねぬる朝けの風は袂塞しも、又古今集に云水くさのをかのやかたにいとあれとねての朝けの霜のふりはも○あさけとは、朝明なり、谷川氏は朝氣なりといへり

○あまにるき

枕艸紙に云あまにるきたる兒の目に、髪のおほひたるを、かきはやらで、うちかたひものなど見る、いとうつくし○あまにるきとは、髪を尼の如く、頂にて切るをいへり

○あふよりて

枕艸紙に云あふよりて、三人四人集ひて、繪など見るもあり○あふよりとは、奥の方によりてといふことなり

○あすはひのき

枕艸紙に云あすはひのき、此世近くも見聞せず、御嶽に詣て、歸る人など、しかもてありくめる○あすはひのきとは、俗にあすなろうといふ、檜に似たる一種の樹なり

○あやめ

十六夜日記に云日は入りはて、なほあやめもわかぬほどに○あやめとは、文目の義にして、物の形状色合なり、あやめもわかぬとは、黑白もわからぬといふ義なり

○あめのあし

枕艸紙に云待つ人などある夜、雨の足音、風の吹きゆるかすも、ふと驚かるゝ○あめのあしとは、雨の地に落つるを形容していひしなり、潜夫云あめのあしとは、雨脚どかきて、雲中斜に灰色を刷するをいふ、本項は音の一字にて、地に落るとなるなり

○ありあけ

枕艸紙に云ありあけはた云ふもおろかなり、○ありあけとは、大陰曆にて二十日以後の月をいふ、空にありなから、夜の明くる義なり、されど遊仙窟の古訓に、明月どかきて、ありあけとよみたれば、古へは鮮明なる月光を。ありあけといひしなり

○あさみ

更科日記に云うころざしきともに移るとて、いきちかふ馬も車も、かち人もあれば、なてうことやすからず、いひねどろさあさみ笑ひ、あさけるものとも、あり○あさみとは、淺みにて、心淺しとあさけるやうの意なり、あさのさの字は、にぞらぬかよし

○あまのなはたき

古今集に云思ひさやひなのわかれにおとろへてあまのなはたきいさりせんとは○あまのなはたきの、たきとは、手繰(たくり)の約言なり、俗に延纏(はへなは)といふものを、取り扱ふをいふ意なり

○あさび

枕艸紙に云あさびのひはしと云ふこと、なとてか世になきことならば、皆人しりたらん○あさびとは、門火なり、あさかと相轉したるなり

○あふち

枕艸紙に云木のさまを悪けなれど、あふちの花いとをかし○あふちとは、字にて棟どかきて俗にせんだんといへり、此木をや、もすれば、樽の字を當てかく人あれど、當らざるなり、樽は悪木にして匠も取らすといふ、我せんだんは、しからざるなり

○あしかず

古今集に云わたつみの濱の真砂をかるへつ、君か千年のあしかずにせん、又玉葉集

に云限りなき千代のあまりのありかすはけふかそふともつきしと思ふ○ありかすとは、定まりたる數といふ義なりといふ説われども、又或る人は定まれる外に餘計にある數なりといふ、玉葉集の歌の心は其説の如し

○あららめ

万葉集に云あららめのあさらの衣あさらかに思ひて妹に逢んものかも○あららめとは、薄紅に染めたるをいふ、万葉集には、桃花裾をよめり、今いふ、ときいろなり

○あつかはし

枕艸紙に云あはかりがるびすしけなる中に、あつかはしけなるへけれと○あつかはしとは、もの、厚く肥れたるなり、移りては、あつくるしさの義にもなれり

○あくにはうつる

古今集に云くれなるに染し心もたのまれす人をあくにはうつるてふなり○あくにはうつるとは、紅を染むるには、糞灰の灰汁(あく)をさせは、色の出るものなれば、しかいへり、此歌にては、うつるといふは、色のはなやかにかはる義にして、さむることにはあらざるなり、潜夫云此歌は、紅にうめし心といひ、赤心をさし、あくにはうつるといひ、悪に移るをいふなり

○あまつら

古今集に云山かつの垣にはへる青つらら人はくれとも言傳もなし○あまつら

とは、色青さかつらにて、籠などを結ひ堅むるに用ふ、世俗にも葛籠といふこれなり

○あさがれひのま

枕艸紙に云あさがれひのまに、うへはおはします、御覽していみしうれとるかせ給ふ○あさがれひのまとは、朝の御膳をわかる座敷をいふ

○あやなし

古今集に云春の夜の闇はあやなし梅の花色ころ見ぬねかやはかくる○あやなしとは、詮なしといふ意にて、無益といふに近し、潜夫云あやなしは、文なしにて、目にみゆるものなきをいふなり

○あへぬ

古今集に云心ざし深く染めてしをりければさねあへぬ雪の花とみゆらん○あへぬとは、おほせぬといふことなり、俗にさらぬといふに同じ

○あさぢ

古今集に云思ふよりいかにせよとかあき風になびくあさぢの色ことになる○あさぢとは、淺茅にて、茅といふ草は、深からぬものなれば、かくいふなり

○あじろ

枕艸紙に云あしろは走らせたる人のかどより、わたりたるを、ふと見る程もなく過きて、どもの人はかり走るを、誰ならんと思ふこそ、をかしけれ○あしろとは、

竹にて網代に組みたる車をいふ網代の名は漁家より云ひ出てたる詞なるへし

○あやめのかつら

枕艸紙に云さつきのせちのあやめのかつらうと、あやめのかつら、又万葉集に云郭公
あくとさもなしあやめ草かつらにせんとこゆなきわたる、又年中行事歌合に云射手
人のあやめのかつらなかさねにけふの眞弓を引さやそへまし○あやめのかつらとは、

○あわゆき

古今集に云あわ雪のたまればかてに碎けつ、我物思ひのしけき頃哉○あわ雪とは、
日本紀に沫雪とかけり、釋に其弱き水沫の如しとあり、後世は春雪のこと定めたる
も、古へは然らず、鈴屋翁も、たゞ雪のことなり、万葉集にも例多し、其さまの沫
に似たるゆへに、しかいふなりと説けり、此説いかにもよろし

○あらか

十六夜日記に云涙のこはるゝを、あらかかに、物いひまきらはすも○あらかとは、
荒らやかにて、荒さまにといふに同じ

○あひ三人

更科日記に云麓に宿りたるに、月もなく暗き夜の、闇に惑ふやうなるに、遊ひ三人、
いつくよりともなく出て來り○あそひ三人とは、遊女三人にして、遊ひとは、歌な

どうたひて、旅人の心を感じ、生活するものなり

○あて

更科日記に云わてにをかしけなる人と見ゆて、うち驚きたれば○あてとは、貴とく
上品なるをいふなり

○あせあゆる

枕艸紙に云すゝろに汗あゆる心地をしける○あせあゆるとは、汗に浸さるゝをいふ
なり

○あからさま

更科日記に云十月つごもりかたに、あからさまにきてみれば○あからさまにとは、
假り初めにといふに同じく、わざゝの反對なりとす

○あやめ草

古今集に云時鳥鳴くやさつきのあやめ草あやめもしらぬ戀もする哉○あやめ草と
は、世俗に菖蒲と呼ひ、昔しは五月五日の節句に、軒端に菖さ、禁中にては、冠の
巾子にもかけ、御簾にもかけし者をいふなり、世俗此菖蒲に似て、花ある者を花菖
蒲、又夫れより短小なる一種を、あやめといふより、初學の輩はやゝもすれば、昔
しのあやめも今のあやめといふものと同物なりと思へり、是れ大なる誤りと知るへ
し、潜夫云此種は甚だ辨し難くして諸説あり余聞見により私説をなす左の如し乃ち

四種とするなり

一しやうぶ、(古へあやめといふ)葉細長にして光澤あり、香氣あり、水生にして、花稀れなり、十八史略に菖蒲花を生するを見て之を香むとあり、其花至て稀なり、一二寸にして、石菖蒲の花に似たり、乃ち石菖蒲の長大なるものなり、今も陰曆五月五日に、屋上に置き、又浴湯中に入る、是れを菖蒲湯といへり
二花菖蒲、葉に光澤なく、又香氣なく、花は三瓣五瓣六瓣ありて、色は紫白碧及び斑色あり、第一と全く異種なり、但水生なり

三かきつはた、第二と略は同じ但土生とす、蓋し同物にして、水生土生の別あるのみ
四あやめ、第二第三に似て短小なり、三の一にあたらす、亦土生とす

第一は石菖蒲、炭又は石に付け盆栽とするもの、類にして、長大なり

第二三四は同種にして、長短と、水土生の異なるのみ、第一とは全く異種なりとす

○あけたては

古今集に云あけたてはせみのをりはへなきくらしよるは螢のもねころわたれ○あけたてはとは、夜のあけるをいふなり

○あらかふ

枕艸紙に云さらに知らぬよしまうしに、あやにくにしひ給ひし事などいひて、あることあらかふは、いとわひしうこそありけれ○あらかふとは、争ふといふに同じ

○あしももち

紫式部日記に云同侍をあら、かにつき驚ろかして、三人ふるく足もそらにてまゐりたれば○あしももちとは、あはて、あゆむ体を形容せしなり

○あえましく

紫式部日記に云よろづの飾りも、まぶらせ給ふめれ、千代もあえましく○あえましくとは、肖の字をかきて、俗にあやかりたいといふに同じ

○あなづり

枕艸紙に云髪つさわろき人も、いたくもつくるはす、よせて下るへきものと思ひあなづりたるに○あなづりとは、悔るの轉語なり、今も俗にしかいへり

○あまざる

古今集に云うめの花それともみぬす久方のあまざる雪のなへてふれ、は○あまざるとは、天遮るの義にして、空のかさくもりて、日光をもさへさうたるをいふ

○あくら

枕艸紙に云御機敷の前にあくら立て居たるなど、げにそなはめできた○あくらとは、胡床をかきて、椅子の類なり

○あまびと

古今集に云あまびこのれとつれしとそいまはあもふわれか人かどみをたどるよに○

あまひことは、天日子にして、狭衣物語に、狭衣大将の笛の、音にめて、天下りし
とある天若御子とある、天人のたぐひなるへし

○あふぎにはづれたるかたはらめ

紫式部日記に云あふぎにはづれたるかたはらめなど、いと清らに侍りしかなつあふ
ぎにはづれたるかたはらめとは、かざしたる扇の横さより見ゆる、横顔をいふな
り

○あしで

紫式部日記に云箱のふたにあしでにうち出てたるは、日蔭の返事なんめり○あしで
とは、蘆手書とよみて、一法の書さ方なり

さ 之 部

○さらなり

徒然艸に云一の人の御ありさまはさらなり○殊更の義なり

○さゝめく

源氏等木卷に云この近きもやに、つとひゐたるなるへし、打さゝめさふことども
を聞給へは○此詞は、字にて耳語密語とかきて俗に内證とさるゝやくなどいふに
同し

○さへなく

徒然艸に云かたち心さまよき人もさへなく成ぬれば○さへなくとは字にては無才と
かく、才は本なり故に天才などいへり

○さすか

竹取物語に云竹取の翁、さばかりかたらひるか、さすかに覺て、ねふりをり、又
伊勢物語に云あま雲の餘所にも人のなりゆくか、さすかに目には見ゆるものから○
是れは元來は、しかするなからといふ詞なるが、約まりて、しかすかとなり、又夫
をつゝめて、さすかとなれるものにて、俗言にうつさは、左様にはするもの、只
其方計りも定めかぬるといふやうなる意にて、畢竟本を忘れぬ義なり、俗曲吾妻八
景に云柳の髪に三日月の櫛もさすかの銀世界、さすかは流石の字を用ゆるもあるな
り

○さるかたに

徒然艸に云待こともなく明し暮したる、さるかたにあらまほし○此詞はさるかた
の、あを略したるものなり、又云やさしさかたにありたさとの意なり

○さゝかに

古今集に云いましはとわひにしものをさゝかにの衣にかゝり我を頼むる○さゝかに
とは蜘蛛の異名なり、此蟲足八つありて、蟹に似て形も小なり、さゝとは、さゝや
かなどいへる如く、細小の義なりとす

○さか行

徒然艸に云夕の日に子孫を愛して、さか行するを見んまての命をもらまし○さか行とは、さかへ行末をいふなり、證歌いまこそわれわれもむかしはおとこ山さかゆくとさもありこしものを

○さむしろ

古今集に云さむしろに衣かたしき今宵もや吾を待つらん宇治の橋姫○さむしろとは、狭き席をいふなり

○さゝやか

徒然艸に云さゝやかなるわらはひとりをくして、はるかなる田の中のほろみちを○さゝやかとは、ほろやかにちひさきなり、源氏筆木卷に、さゝやかにてふしたり、河海抄には細々許、少々、共にさゝやかと訓せり

○さいし

方丈記に云さいしとしてしろき元結したり○さいしとは、字にて釵子とかく、髪をわくる時に用ゆるかんざしの類なり

○さやか

徒然艸に云有明の月さやかなれども、くまなくはあらぬに○さやかとは、月明らかなるをいふ、さやかは、さむやかの略にて、さむるか主意にて、や助かは語なり、

又さやけきなど用ゆるも皆異なることなし

○さうふのこし

枕艸紙に云三條の宮におはします頃、五日のさうふのこしなど持ちて参り、又年中行事歌合に云みさ給ふけふのためとや菖蒲草六つのつかさもかねてひきけん○さうふのこしとは、菖蒲の輿とかけり、輿に菖蒲を積みて五月五日禁中に参るなり、是れは六衛府より奉るなり、後項の歌に六つのつかさといふ是れなり、又公事根原に出たり

○さうなき

徒然艸に云俗姓は三浦のなにかしとかや、さうなき武者なり、故郷の人の来りて物語すとて○さうなきとは、無雙とかき、又無左右ともかけり、何れもならふものなきの意なり

○さへづり

紫式部日記に云怪敷賤の男の、さへづりありけしきとも道○さへづりとは、賤者の口早に物いふを、鳥類の囀るに譬へていへるなり

○さきをはれける

徒然艸に云此殿大將にてさきをはれけるを、土御門相國、社頭にて警驛いか侍るへからんと申されければ○さきをはれとは、隠聲、河海にあり、又喝道、前呵、

警驛みな、さきこゑなり、眞言には、阿吽の二字のならひありといふ

○さつを

万葉集に云むさゝひはこぬれもとむる足引の山のさつをにわひにけるかな○さつをとは、幸男の義にして、狩する人を云ふ、潜夫云幸の字、さちとよむ、國史略に山の幸海の幸の句あり

○さかしき

古今集に云さかしれろかななりと、しろしめしけん、又土佐日記に云ことひとくのもありけれど、さかしきもなかるへし○さかしきとは賢哲の意にして、上古は判明したれども、遂にかしこき(畏恐)と相混し判明せざるに至れり、是れさかしきと、かしこきと、其詞の相似たるより、全く相混するなり、然れども、決して混すへき詞にあらず、全く意義相異なれば、之れを用ゆるもの其心なかるへからざるなり

○さかしき

十六夜日記に云いとさかしき山を下る人の足許とまり難し○此さかしきとは、字にて險阻とかきて、俗にけはしといふ、山路にかゝれり、人性にかゝる、賢哲とは全く異なり、是れは前後の語詞にて區別すへきなり

○さむみ

後撰集に云谷さむみいまたすたらぬ黄鳥のなくこゑわかみ人のすさめぬ○さむみと

は、俗にさむさにといふに同じ、谷さむみは、谷かさむさになり、又月さよみとは、月かさよみにと解し何れもたかふことなし

○さりとて

紫式部日記に云さりとてと思ひなから、いみじうかなしきに○さりとてとは、たとひ左様にはありとてともといふの意なり

○さりとて

十六夜日記に云さりとて、文屋の康秀かさうふにもあらず○さりとてとは、左様なりとの意なりとす

○さしはへて

拾遺集に云玉江こくこもかり舟のさしはへてなみまもあらはよらんとを思ふ○さしはへての、さしとは、發語の詞なり、はへてとは、延へにて、俗にわさくといふに同じ

○さく

枕草紙に云五位六位などの、下重ねのしりをはさみて、さくのいと白き方に、うちれきなどして、とかくいさちかふ○字にては笏とかきて、装束の時持つものなり、潜夫云笏は我國にて、しやくと云ふしやくを反切法にて約すれば、さとなる乃ちさくといふなり

○さいまくら

枕草紙に云物語りなどするにさし出て、我一人さいまくらの、すへてさしむれば、
わらはもれとなもいとにくし○さいまくるとは、字にては才とかきて、まくるとは
助語なり、清水濱臣の考に、俗に追ひまくるなどいふ、まくるにて、語勢を強くせ
しものといへり、いかにもしからん、我は才ありとて、自ら頼むをいふなり

○さへて

枕草紙に云さし構みかく程に、ものにさへてをれたる○さへてとは、さはりてとい
ふ詞のつゝまりたるなり

○さへ

万葉集に云桂は花さへ實さへ其葉さへ枝に霜おけとて常磐木○此さへ、字にて副と
かきて、一つものゝある上に、又一つ副る義なり、故に此詞は、對する者なき時は、
用ふへからざるなり

○さすらへん

更科日記に云京の中にて、さすらへんは、例のこと、東の國、田舎人になりてまを
はんは、いみしかるへし○さすらへんとは、字には浮浪とかきて、身の落ちふれ、
さまよふさまよふ

○さす

十六夜日記に云たふてにまかせて、思ふまゝに、いそぎ來るつかひとて、かささ
すやうなりしを○此さすとは、俗にかさくさす、又かさかけの、くさす、かけに同
し

○さいたつ

枕草紙に云いと近くさしゆみ、さいたつものなとを、はし人のおはしますに○さ
いたつとは、字にて先立つとかき、音便にて、さいに、かへしなり

○さゆる

權のしつ枝に云寒きことを、さゆるといへは、叶ふやうなるにつきて、初學の人、
しか心得てよめる歌多し、○さゆるとは、さむきと、いさゝか、心ことなり、拾遺
集に、とひ通ふをしの羽風のさむければ池のこほりうさぬまざりける、此さゆるは、
凍々などかきて、凄清の義なりとす、又千載集に、いてぬより月見よどこそさゆるに
けれをばすて山の夕くれのうら、これは、清く晴れたる、空のさまをいへり、初學
の人は、古歌により、能く其意を味ふへし

○さふらひ

古今集に云さふらひにてをのこ共の酒たうへけるに召して郭公待つ歌よめとありけ
ればよめる○さふらひとは、侍所にして、俗に休息所といふなり

○さらはひ

徒然草に云後日にむくいぬの老さらばひて、毛兀たるを○さらはひとは、莊子の古訓に髡の字を、さらばふとよみ、骨と皮と計りになりたる体をいふ、俊頼の歌にも、山陰にやせてさらはへる犬櫻ねひ放たれて訪ふ人もなし、とあり

○さくらさき

更科日記に云こゝちよけに、さくらさき流れし水も、木の葉にうつもれて○さくらさきとは、水のさら〜と流るゝをいふなり、浅川のさまなり、せ〜らさといふも、此語の轉したるものと知るへし

○さるがうこと

枕草紙に云た、日一日、さるがうことをし給に○さるがうこと、は、猿樂(さるがう)の狂言の如く、されことをいふよしなり

○さくなんざ

拾遺集物名に云紫のいろにはさくなんざ武藏野の草のゆかりと人もこそみれ○さくなんざとは、石楠草の字音にて、さくなんざの下のは草の約りたるなり、和名抄に、石楠草、和名とひらのさ、俗に云ふ、さくなんざなり、此物草とはいへど、草にはあらず、和名抄には木の部に入れたり、潜夫云石楠花は其葉讓葉に似て、花は擬寶珠草に似て、其色淡紅にして、稀れに白あり、初夏に開く、大和に多し

○さたすきぬるをかうにて

紫式部日記に云さたすきぬるをかうにてぞ、かくろふる○さたすきぬるをかうにてとは、年の老ぬるをいひぐさにして、人に隠るゝ意なり、かうとは、功の字音にして源、氏物語には轉用して、かうといへり

○さいち

枕草紙に云又尊きこと、道心多かりとて、説經すと云ふ處に、さいちにいさぬる人こそ、なほ此罪の心地には、さしもあらて見ゆれと○さいちとは、最初の字音のつまれるなり

○さか

後撰集に云もあわたるなけさは春のさかなればはかたにころあはれものみれ○此さかとは、性質といふか如し

○さうぶのさしくし

枕草紙に云ねはんせくまわり、わかき人々は、さうぶのさしくし、ものいもつけなとして○さうぶのさしくしとは、菖蒲を以て飾れるさし櫛をいふなり

○さきとし

竹取物語に云御子答へてのたまはく、さきとしの二月の十日頃に○さきとしとは、さき前(さき)の畧なり、をば遠(をち)のちをどに轉したるなり、一昨日を遠津日(とつひ)とすふ例にして、扱て一昨々日ともいひ又俗にさきとしの日といふに

同じ、四年より元年をいふ意なりとす

○さうひ

古今集物名に云我はけさうひにうみつる花の色をあたなるものといふへかりけり○さうひとは、薔薇の字音にして、雅言には、いはら、又うはらといひ、俗にばらとて、美しさ花の咲く木なり、漢名長春ともいふ

○さるとりの花

拾遺集物名に云鳴聲はわまたすれとも鶯に優る鳥のはなくこそありけれ○さるとりの花とは、和名抄に、和名さるとり、一に云ふ、ねはうはらとあり、蔓草にて、今も地方により、俗にさるとりばらと古名のまゝにいふ者これなり、潜夫云さるとりいはらは其葉葵の如く、蔓健にして、刺鋭なり、赤色の實を結ふ、万年青の子の如し、愛すへきなり

○さかりこけ

古今集物名に云花の色はた、一盛りこけれとも返すくろつゆはそめける○さかりこけとは、和名抄に、松蘿、一名女蘿、和名、万豆乃古介、一に云佐流乎加世といふもの同物なるへし、和名抄に、さかりこけといふ名はみねねと、深山の老松にかゝれる苔は、非常に長く垂るゝものなれば、下苔(さかりこけ)といふ名によく叶へり、極めてこれを云ふなるへし、然るを此さかり苔と、ひかけとは、別物なり、其

故は、和名抄にも蘿(ひかけ)は別にわけて、蘿は女蘿なり、和名比加介といひて、俗にはこれを、兎のたすきといひて、樹蔭などの地上に蔓延せり、故に此草は、下り苔といふへき者にはあらず相混すへからず

○さうひもの

枕草紙に云さうひもの、むじきをくらひぬるをも、若きはものもゆかしからん

○さうひものとは、精進物の字音なりとす

○さうくし

枕草紙に云おもの、をりは、必ず向ひさふらふに、さうくしくこそあれなどいひて二三日になりぬ○さうくしとは、蕭々の字音にして、なだらかによませたるなり、蕭々とは、ものさみしきなり

○さへき

更科日記に云思ひなしさへきおそろしきに、さへき所に召して○さへきとは、さるへきと同じ、然るへきの意なり

○さもあらはあれ

伊勢物語に云思ふには忍ぶることそまけにけるわふにしかへはさもあらはあれ、又新古今集に云さもあらはあれくれ行く春も雲の上にあつることしらぬ花し句は、○さもあらはあれとは、うればとふてもかまはぬといふ意なり、一任、又は放任などか

けり、禮夫云さもわらはあれと訓する中に、莫遮、又は渠遮等の字あり、此意稍や重し、同じくさもわらはあれと訓するは未だ其意を盡さるなり、故に本訓に、遮るなしとよむをよしとす

○さるな

千載集に云これも昔さそな昔しの契りろと思ふものからあさましき哉、又新古今集に云露は袖にも思ふ頃はさるなおこなならず秋のならひならねと○さるなどは、しかそといふことにて、如此といふ意なり、さるとをしはかるにはわらす

○さ、らえをとこ

万葉集に云山のはのさ、らぬをとこ天の原と渡る光り見らくしよしも○さ、らぬをとことは、月の異名なり

○さわらか

枕草紙に云小舎人はちひさくて髪麗はしきか、すそさわらかに肥ぬ、をかして○さわらかとは、さらくとしたる意なり

○さいなむ

枕草紙に云馬の命婦もさいなみて、乳母代へてん○さいなむとは、さいなまることにて、呵責せらるなり

○さうぞきたまへる

紫式部日記に云わか色のからの御ぞぢすりのね面麗はしく、さうぞき給へるも、かたじけなくあはれにみゆ○さうぞき給へるとは、装束の名詞を、動詞に活用したるものなり

○さだすま

更科日記に云としはややさだすまゆくに、若々しきやうなるもつきなうれはぬ○さだすまとは、中央をさぐる義にして、人の盛時の衰ふるをいふなり

○さるへき

更科日記に云さるへき人々、一代に一度の見物にて○さるへきとは、然るへきさるへきに同じ

さ 之 部

○さきも

徒然坤に云民の愁、國のろこなはるもしらす、方にさよらをつくしていみしと思ひ○さよらとは、字にて清どかく、乃ち清楚花麗なる心なり

○さくは

住吉物語に云叶はん事は知らず、御ふみをもて参りてこそ見侍らめと聞ゆる○此聞ゆとは、俗に申し止るといふに同じ、凡て貴人に對してものいふ時は、我口の方に向けて、申すといふは不敬に當れり、故に貴人の耳にうけて、聞ゆといふは自から尊

敬の意に當れり、故に物語書をよむには此心得るべきことなり又源氏桐壺卷に云か、やく日の宮と聞ゆ○此聞ゆといふは風聞の聞にて、世に聞ゆるたるの義にして、前項の聞ゆとは其意義全く異なり、詞の轉用に心をつくへきなり

○きぬかつき

徒然艸に云いかなる意趣か有け、物見けるきぬかつきのよりて、はなちてもどのやうにをきたりけるとそ○きぬかつきとは、衣被とかく、宮女の名なり、潜夫云名にはあらざるへし、宮女の稱ならんか

○きんたち

枕艸紙に云わらはなるきんたちなど、いとをかしうてればす○きんたちとは、字にて公達とかく、公達とは、貴公子をいふなり

○きりくしく

徒然艸に云おかしくもきりくしくも、さまくに行かふ、見るもつれくならず○きりくしくとは、美麗なる義なり

○きかく

後撰集に云獨りぬる人のきかくに神無月俄かにもふる初時雨哉○きかくとは、聞くなり、かくの二字を反切法にて約すればくとなる、故に又くの字を延ぶればかくの二字となる、乃ちかくは、くの原音なれば之れを用ゆるなり

○きちかう

徒然艸に云秋の草は萩薄、きちかう萩女郎花、ふちはかましをに、われもかうかるかや、りんたうさく、黄菊も、つたくす朝かは○桔梗なり、證歌、秋ちかう野は成にけり白露のをける草はも色かはりけり、是れ古今物の名の歌なり、秋ちかうの五字の内きちかうの四字をかくせり、是れは謎語の体とす

○きりくす

古今集に云きりくすいたくな鳴る秋の夜の長さ思ひは我る増れる○きりくすととは、字にては、蟋蟀とかきて、今こほろさといふ蟲なり、東國にては、促織を讀んで蟋蟀といふ、是より人誤りを受け、促織を以て、きりくすと思へり、潜夫云きりくすは、ゐとじなり、こほろぎにはあらず、こほろぎは、秋に鳴き、ころくといふ、性よく闘ふ、冬に及はす、ゐとじはじいくと鳴き、冬に及ふ、百人一首に、きりくすなくや霜夜のさむしろに、又詩に云、蟋蟀堂にあり歳こゝに暮る、乃ち冬に及ふを知る、豈にこほろぎならんや

○きり

万葉集に云うち日さすみやのせ川のかは花のこひてかぬらんさうもこよひも○きりとは、昨夜をいふなり

○きはやか

○國文學資料のきこ部

枕艸紙に云きはやかに起きて、ひろめきたちて、さしぬきの腰強くひきぬひ〇まは
とは、際の字にして、やかとは助語なり、俗にさつぱりといふに同じ

○きえかへり

古今集に云我宿の菊の根にれく霜のさねかへりてう戀しかりける〇さねかへりと
は、身も消ゆるする様になりて戀しいと、いふことをかへりてといふをうへ、語勢
を強くせしなり、又同集壬生忠岑の歌に云、かき暮しふる白雪の下さねに消ても
思ふの歌併せ考ふへし、潜夫云、かへりとは、漢語の却の字の訓にして、其用も亦
同じ、醉、惱、失、遣の字の如き、特に其意を重くせんと欲せば、却の字を添ふ、
乃ち醉却失却の類の如し

○きしめく

枕艸紙に云きしめく車に乗りてゐるくもの、耳もさかぬにやめらんといとはくし〇
きしめくとは、軋る音をいふなり、めくとは形容詞とす

○きんぐ

枕艸紙に云きんぐうつころをかしけれ〇きんぐとは、金鼓とかきて、佛前にて用ゆ
る樂器なり、ぐはこより轉し來り又濁音なるは音便にして、んより清音に續くは、
迂なれば、濁又は半濁によむなり、此例甚た多し

○きさいの宮

古今集に云寛平の御宇きさいの宮の歌合の歌〇きさいの宮とは、皇后宮の御事にて、
きさいの宮といふは、言便にならめたるものなり

○きさのき

拾遺集物名に云世と共にしはやくあまのたねせねはなきさのきのは焦れてそちる〇
きさのきとは、象牙のことなり、象は和名きさ、牙は和名き、俗にさばともいふ、
又かけばともいふ

○きしのきどり

拾遺集物名に云河岸のをとりぬるへき所あらはうきにしにせぬ身はなけてまし〇き
しのをとりとは、雉子の媒鳥にして、雉子を捕るには、同類の雌鳥を雄鳥の鳴き居
る所に投出せば、雄鳥は其羽音を聞て、寄り來る者なり、夫を見澄して打ちとるなり、
其雌鳥を、をとりといふは、をさとりにて、招鳥の義なり、演劇を、わさをさとい
ふも、其わざの巧みなるによりて、人を招く者ゆへ、業招といふに同じ

○きしまことまめ

枕艸紙に云歌はと問はせ給ふ、かうくと啓すれば、くち惜のことや、うへ人など
のきかんに、いかでをかしまなくてあらん、その聞きつらん處にて、ふどころよま
ましか、あまりきしまことまめつらんぞ、あやしきや〇きしまことまめとは、きし
まは、儀式にて、あまり儀式めきて、氣をこらし、よき歌よさんとするによりて興

さめ、うたの出来ぬといふ義なり

○きぬく

古今集に云しの、めのはからく、とわけゆけはたのかきぬく、なるそわひしき○きぬくとは、男女曉に別る、時、一つになりぬし、衣(きぬ)と衣とか、別々になりゆくをいへるより起りたる詞なりとす

ゆ之部

○ゆゑし

紫式部日記に云けろくなどゆゑし、しくて○ゆゑし、俗にことしくといふか如し

○ゆきあかれぬ

徒然艸に云ちりく、にゆきあかれぬ、もとのすみかにかへりてろさらになしき事はおはかるへき○ゆきあかれぬとは、分散と書きてあかる、とよめり、こゝにては、別々になりて退散する義なり、又れかを、わかといひ、わかつを、わかつといふ時は、わとわと通する故に、あかるも、わかるゝの義なるへし

○ゆふつくよ

古今集に云ゆふつくよとすや岡邊の松のはのいつともわかぬこひもする哉○ゆふつくよとは夕月夜なり、つきのまを、くと通はしたるなり

○ゆへつきたる

徒然艸に云こまごしぬき、いとゆへつきたるさまにて○ゆへつきたるとは、似合たる義なり

○ゆふつ

枕艸紙に云すばる、ひこぼし、明星、長庚、流星○ゆふつとは、俗によひの明星とらふ

○ゆすり

枕艸紙に云また家ゆすりて、とりたるむこのことなりぬる、いとすままし○ゆすりとは、俗に大騒ぎしてといふの意なり

○ゆする

徒然艸に云よき男の日くれてゆするし、女も夜ふくるほどにすへりつ、○ゆするとは、源氏東屋の巻に、ゆするのなこりにや、河海抄に、沐の字をかけり、沐浴をいふ

○ゆふたすき

古今集に云千早振かもの社の夕たすき二日も君をかけぬ日はなし○ゆふたすきとは木綿を禪にするをいふなり

○ゆし

◎国文学資料 ○ゆ之部

紫式部日記に云風の涼しき夕暮、さよよからぬ、ひとりことを極鳴しては、なげき加はると聞知る人やあらん、ゆゑしくなど覺へ侍る〇ゆゑしとは、忌々しといふ語の約まれるなり、本日記の時代の書は皆其意味なりとす、然るに太平記の時代にいたりては、皆此意に用ひたるものなく只勇々しくの義に用ひたり、古書をよむもの其心なかるへからず

〇ゆだけ

枕艸紙に云命婦のめのと、いとよくぬひはて、うち置きつるゆだけのかたのおんみを縫ひつるか、そむきとまなるを見つけすとぢめもしあへず、まどひれきて立ぬ〇ゆだけとは、字には、弓長とかきて、衣の左の片身をいふ、弓手なればなり

〇ゆめのた、ち

古今集に云こひわひて打ちぬる中に往き通ふ夢のた、ちはうつゝならなん〇ゆめのた、ちとは、夢の直道といふことにて、まどよことなく、真直にゆく道なり、万葉集には、直路とかけり、戀ひ思ふ夢は、うつゝの中にも、迂回せざるをいふなり

〇ゆふかみ

枕艸紙に云馬は紫の斑つきたる蘆毛いみしう黒さか、足肩のわたりなどに、白さ處、薄き紅梅の毛にて、髪をなともいと白さ、けにゆふかみとも云ひつへき〇ゆふかみとは、木綿髪(ゆふかみ)にて、白さを形容せしなり

〇ゆくへ

新古今集に云ゆらのとを渡る船人かちをたぬゆくへも知らぬ戀の道かな〇ゆくへとは、字にて行方とかきて、へは方なり、行く方角を指すなり

〇ゆくりもなく

十六夜日記に云身をようなき物になしはて、ゆくりもなく、いさよふ月にさうはれ、出ななどを思ひ成ぬる〇ゆくりもなくとは、不意とかきて、思ひかけすといふ義なり、又不慮ともかける所ありとす

〇ゆふつかた

更科日記に云春ころのとやかなるゆふつ方〇ゆふつかたとは、俗に夕方、又は晚景などいふに同じ、ゆふつのは助辭なり

〇ゆふつけり

古今集に云逢ふ坂のゆふつけ鳥もわか如く人やこひしきねのみなくらん〇ゆふつけりとは、木綿(ゆふ)を足に結ひつけて、逢坂の關に放ちたる雞をいふなり

〇ゆきかひぢ

古今集に云かり初のゆきかひぢとは思ひこし今は限りのかどてなりけり〇ゆきかひぢとは、往來の路をいふ、通ふを、かひとつゝめ、甲斐の國の名にかけたるなり

〇ゆら、か

枕艸紙に云そはのかたに、かみのうちたなはりて、ゆらかなるほど、なかさおしはかられたるに、○ゆら／かとは、俗にゆら／と云ふに同じし。

○ゆたのたゆた
古今集に云いで我を人などかめろればふねのゆたのたゆたに物思ふ頃そ○ゆたのたゆたとは、俗に、ゆた／と、又ゆつたりなどいふに同じし。

○ゆくさくさ
万葉集に云白菅のまの／はり原ゆくさくさ君社見らめ眞野のはり原、又同集に云わたつみのいつれの神をいは／はかゆくさくさも舟のはやけく○さば様なり、ゆくさくさくさにて、ゆさ／のやうすといふなり。

○ゆふされは
古今集に云ゆふされはいともひかたさわか袖に秋の露さへれさをはりつ／○ゆふされはとは、ゆふへになれはといふ義なり。

○ゆるぎあるく
枕艸紙に云おはれいみしく、ゆるぎあるきつるものを○ゆるぎあるくとは、意氣揚々として威張り歩行するをいふ。

○ゆめ
更科日記に云奈良坂の此方なる家を尋ねて宿りぬ、これもいみしげなる小家なり、

こゝにはけしきある所なめり、ゆめいぬな○ゆめとは、忌めの轉語にして、命令の詞なり、謹めといふ意になれり、つゝしみてぬることなかれの義なり。

○ゆふかけくさ
万葉集に云我宿の夕かけ草の白露のけぬかにもとな思はゆるかも、又新勅撰集に云にはにおふる夕かけ草の下露やくれを待間の涙なるらん○ゆふかけくさとは、一種の草の名にあらず、夕方の草をいふなり。

○ゆふかたまけて
万葉集に云いつはとはこひぬとさとはあらねともゆふかたまけてこひはすへなし、又同集に云草枕旅にものどひわかきけは夕かたまけてなく蛙かも○夕かたまけてとは、くれにむかひての意なり、かたまけは方向の意をいふ。

○ゆく／と
万葉集に云にふ川のせはわたらすてゆく／ととかこひたさわがせいてかよひこね、又拾遺集に云さみか住む宿の木末のゆく／ととかくる／迄にかへり見しはや○ゆく／ととは、物思ひに思ひたゆたう意なり、大舟のゆく／とといふに同じし。

め之部

○めてたし
徒然艸に云めてたしと見る人の心をとりせらる／○めてたしとははめたる詞なり、

尊貴美麗の人をいふなり又事物に付ては俗に結構といふの意なりとす

○めをこやし

更科日記に云いかなる心ある人にか、一時がめをこやして何かはせん○めをこやしとは、めを肥しにて、目を喜ばすの意なり

○めさけ

万葉集に云あかぬしのみたまたまひて春さらはならの都にめさけ給はね○めさけとは、召上の訓を約したるなり

○めかれぬ

古今集に云くるとあくとめかれぬものを梅の花いつのひとまにうつろひぬらん○めかれぬとは、目離(めがれ)すの意にして、目をはなさず、見て居るの義なり、離るゝことを、かるゝといふ例をいへは、毎夜來し人の來すなるを、よかれ(夜離)といふ是れなり

○めやすく

住吉物語に云今二人の御娘達と打語りひて、おはしますをみて、いと嬉しきことにそめやすくねはしける○めやすくとは、見安きの意にして、俗に見よきなり、見にくきの反對と心得てさわるることなし

○めなまふ

古今集に云花かたみめならふ人の數多われは忘れぬらん數ならぬ身は○めなまふとは、花籠の目の並ひてある如く、外によき女の數多われはの意なり

○めのと

源氏夕顔巻に云六條わたりの御忍びありとの頃、うちよりまかて給ふ中、やどりに大貳のりのどのいたく煩ひて○めのと、俗に乳母をいふことなり

○めさし

古今集に云こよろきの磯にちならし磯なつむめさしぬらすなまきにをれなみ○めさしとは、舊説に、俗に目籠をいふものならんとす

○めさぞ

枕草紙に云三つはかりなる兒の急きて這ひくるみちに、いと小さき塵などのありけるぞ、めさぞに見つけて、いとをかしげなるをよびにとらへて、おとなゝとに見せたる○めさぞとは、目敏をかきて、目早さをいふ

○めをくばす

枕草紙に云かつきするあまのすみかはそこなりとゆめいふなどやめをくばせけん○めをくばすとは、和布(わかめ)を喰はすに、目くはせと云ふ事をかねたり、めくはせとは、それといはず、目を以て、其意を知らずといふなり

○めのささげ

後撰集に云梅がぬにぶりおける雪を春近みめのうちつけに花かとうみる○めのうちつけとは、目のさしさをためをいふなり

み之部

○みぢむすひ

徒然艸に云みなむすひといふは、糸を結ひかさねたるか、蟪といふ貝に似たればいふと○みなむすひとは、公家の表袴或は僧家袈裟などに、かさり糸を以てむすひさくるあり、是をみなむすひといふなり、和名集に云、崔禹錫が食經に云河貝子、和名美奈、俗に蟪の字を用ゆるは非なり、音拳、連蟪は虫の屈する貌ちなり、殼上黒く小狹にして長し、人の身に似たるものなり、潜夫云今蟪貝といふものは、淡水に生し色黒く、細長にして、寸にみたす、螺の種にして巻くこと多し、食ふへきものにわらす

○みるめ

古今集に云はやさせにみるめれひせば我か袖の涙の川にうるましものを○みるめとは、海藻の類なり、海松は俗にみるめといふ、人の見る目などにかよはし用ゆるなり

○みき

徒然艸に云御くた物みきなど、よさやうなるけはひして、さし出されたる、いとよし○みきとは、御酒又は神酒ともかけり、潜夫之を聞く、みきとは、三寸とかく、

馬の五寸なるをこさといふか如し、扱て酒を飲めば、冷露肌に近つかさる三寸なり、故に三寸といふと

○みたる

後撰集に云水の面にわやふきみたるはる風や池の水をけふはどくらん○此詞は俗にみたるといふに同じ、歌なるには、矢張みたるど、つかふかよし、みたすとつかへは正しからず

○みちゆきぶり

躬恒集に云玉はこのみちゆきぶりにさくら花折るとや花の我を思ふらん○みちゆきぶりとは、道行觸にて、道のゆきちかいに袖ふる、をいふなり

○みきり

新續古今集に云曇りなき光りをそへて玉しきの砌りにすめる夏の夜○みきりとは、石たゝみなり、然るに後世傍らといふ意に用ゆるは誤りなり

○みづをむすぶ

更科日記に云奥山の石間の水をむすひわけてわかぬものとはいまのみやしる○みづをむすぶとは、手にて水を掬するをいふ、乃ち、すくふなり

○みちもせ

源義家の歌に云よく風をなこそその關と思ひしを道もせにちるやま櫻花○路も

路もせせさまでに散るの意にして、落花の多きを形容していへるなり、野もせといふも野一面の意、庭もせは、庭に餘地なきの義なり、初學の聲や、もすれば、路もせは、只路の事、野もせ、庭もせも、只野や庭の事と心得るものわれど、しからず、思ひまかふへからず、せは、狭なり

○みまねみすまね

古今集に云君といへはみまねみすまねふしのねの珍らしけなくもゆるわかこひ○みまねみすまねとは、みるにもわれ、みざるにもわれといふ義なり

○みちもさりあへず

更科日記に云田舎より物見にのぼる者どもの、水の流るゝやうにろみゆるや、すへてみちもさりあへず、○みちもさりあへずとは、道を避る餘地がないといふ意にて、群集のねびたしさをいふなり

○みろひめ

枕艸紙に云みぞひめのぬれたる、これらみしうわさ○此みぞひめとは、俗にみろひめのうにして、米のうをいふ

○みちのくかみ

枕艸紙に云白く清けなるみちのく紙は、いと細うかくへくはあらぬ筆して、文かきたる○みちのく紙とは、大鷹檀紙をいふ、此紙は、陸奥にて製し初めたるものなれ

夜なり

○みたまのふゆ

會丹集に云いとまなみかひなき身さへ急くなみたまのふゆとらへもいひけり○みたまのふゆとは、奥義抄に云みたまのふゆとは、亡人の恩徳を報んとて、年の終りにこれを祭るなり、下人はみたま祭りとを申す、公家には荷前(のたま)の祭りといふ、されどもみたまのふゆといふ詞は恩願、又皇靈祭の義にあらざるか如し、會丹集に、みたまのふゆと、よみせば、いかゝあらんか

○みかくれ

古今集に云河のせになひくたまものみかくれて人にしらぬこひもするかな○みかくれとは、水隠れの意なり

○みらく

續古今集に云みつしほにかくれぬ磯の松のはもみらくすくなくかすむなる哉、又新葉集に云れしなへてまたさかぬまは尋ねてもみらくすくなく山櫻かな○みらくとは、らくはるの父母音にして、るを延へたるなり、みるの意なり

○みとしろ

風雅集に云夕かけてけふころ急げ早苗とるみとしろれ田の神のみや人○みとしろとは、柳戸代とかきて、神田のことをいふなり

○みはし

枕艸紙に云櫻の一丈はかりにて、いみしう咲きたるやうにて、みはしのもとにあれば○みはしとは、御階とかきて、俗にさざはしといふこれなり、但し所によりては、御泉水の橋をいへり、前後に心つけて、之を知るへし

○みじくり

枕艸紙に云すゝろなる事はらだちて、同じ所にも寝す、みじくり出るを○みじくりとは、俗にすねるといふに同じ

○みなれ

古今集に云よそにのみさかましものをねとは河わたるとなしにみなれろめけん○みなれとは、水馴とかきて、又見馴れると通ひ用ふるなり

○みまくのほしけれは

古今集に云みてもまたまたもみまくのほしけれはなる、を人はいとふへらなり○みまくのほしけれとは、見んと欲するの意にして、みまくとは、見るといふことを、のへていひたる詞なりとす

○みしふ

新古今集に云みしふつき植し山田にひたはへて又袖ぬらす秋は來にけり○みしふとは、水澁とかけり

○みさしるあめ

古今集に云かすくしに思ひ思はずとひかたみみをしる雨はふりうまされる○みをしる雨とは、わか身の憂きにつけ、嬉しきにつけて、こはるゝ涙を准へて、かくいへるなり、實の雨にはあらざるなり

○みづしどころ

枕艸紙に云みづしどころの、れものたなど云ふものに、靴置きて○みづしどころとは、御厨子所にして、清涼殿の西廂にあり、御膳を調進すへき所なり

○みをつくし

土佐日記に云六日、みをつくしのもとより出て、難波の津をきて河尻に入る○みをつくしとは、字にては落標と書きて、海路の淺深の境界のしるしの杭なり、みをとば、水脈をいひ、つとは助辭にして、くしとは、串にて杭をいふなり

○みおこせ

枕艸紙に云車とものかたみみれせて、われとち云ふことも、何事ならんとおはせ○みおこせとは、見起せにて、みるに顔をふりあくるをいふ、れこしと云はて、おこせといふは、おこされての約言なればなり

○みやはしめのさほし

枕艸紙に云みやはしめのさほしうしく、こまらぬおほしやうとなど、もてまらりて○

みやはしめのさほうとは、立后の御儀式をいふなり

○みをつめは

後撰集に云身をつめはあはれと思ふ初雪のふりぬることも誰にいはまし、又拾遺集に云春の野におふるなきなのわひしきは身をつみてたに人のしらぬよ○身をつめはとは、指にて膚をつむをいふ、つむとは、俗についるといふに同じ、我身に引きくらへて人のことを思ひやるをいへり、潜夫云俗諺に、我身つめて人の痛さを知れといふ是れなり

○みくさ

古今集に云わか門のいた井の清水里遠み人し汲まねはみくさおひにけり○みくさとは、水草の訓のつゞまれるなり

○みやこほり

土佐日記に云かゝれども、淡路のたうめの歌にめて、みやこほりにもやあらん○みやこほりは、都へ今日かへる自慢の心といふ意なり

○みはかし

紫式部日記に云うちよりみはかしもて参れり○みはかしとは、御剣をかきて、御守刀なり

○みのしろころも

後撰集に云降雪のみのしろころもうちきつゝ春さにつけりと驚かれぬる○みのしろころもとは、名字には簑代衣をかけり、其義も字の如く、簑に代用する雨衣をいふなり

○みろか

土佐日記に云ある人の子のわらはなる、みろかにいふ、まろ、此歌のかへしせんといふ○みそかとは、ひそかといふに同じ、俗に内證てといふか如し、潜夫云月の最終日なる晦日を、中國にては、つごりといふ、つごりともいへり、東國にては、みろかといふ、本項の意と同じからず

○みかは水

古今集に云東宮の雅院にて櫻の花のみかは水にちり流れけるを見てよめるとあり○此みかは水とは、字には御溝水をかきて、内裏の御泉水をいふなり

○みさぶらひ

古今集に云みさぶらひみかさとまうせみやきの木の下落は雨にまされも○みさぶらひとは、供奉の人々をいふなり

○みじろく

枕艸紙に云居たりつる人も、少しうちみしろを寛ろきて、高座のもと近き柱のもとなどにすゑたれば○みじろくとは、身動をかきて、身をうこかすの義なり

○みやま

古今集に云そま人はみやまひくらし足曳の山の山彦よひと、ひなり○みやまとは、大宮の造營に用ゆる材木をいふなり

○みかはやうど

枕艸紙に云みかはやうどなる者、走りきて、あないみし、犬を藏人二人して打ちたまふ○みかはやうどとは、御厠人にして、賤しき女官なり

○みくり

枕艸紙に云狭山の池みくりと云ふ歌のをかしくねはゆるにやあらん○みくりと云ふ歌は六帖に、ひさしなる狭山か池のみくりこそひけはたぬすれわれやたぬする、とあり、此みくりとは、和名抄に、三稜艸、和名、美久里、とありて、俗に、かやつらくさといふ草なり

○みけし

伊勢物語に云これやこのあまの羽衣うへし社君かみけしと奉りけれ○みけしとは、御衣といふなり

○みのかげとなる

古今集に云戀すれば我身はかけとなりにけりさりとて人にうはぬものゆゑ○みのかげとなるとは、身の瘦せ衰へて、影の如くなるをいふ

○みまはやなから

古今集に云やまかはの音にのみまきくも、しさをみまはやなからみるよしもかな○みまはやなからとは、水脈(みま)の早く流るゝことに、我身の早さをかねたり、我身の早きとは、若かりし時のことなり

○みてくら

拾遺集に云神祭るやどの卵の花白たへのみてくらかどろあやまたれける、又同集に云みてくらはわかにはあらずあめにますとよをかひめのみやのみてくら○みてくらは、幣帛をよめり、ぬさなり、神前にさゝくるものをいふなり

○みまいたつらになす

古今集に云夏むしのみをいたつらになすこともひとつおもひによりてなりけり○みまをいたつらになすとは、夏虫の火に投して死することを、戀する人の命をしまぬにたとへいひたるなり

○みづにかさかく

古今集に云ゆく水にかさかくよりもはかなきは思はぬ人をおもふなりけり○水にかさかくとは、水面に數字をかかけは、跡より消えて形をとめず、故にはかなさをいふなり

○みづく、る

◎国文学資料 ◎夕之部

古今集に云ちはやふる神世もさかす龍田川から紅に水くゝるとは○水くゝるとは、水ぞくゝり染めにせしことは、神世にもさかすといふ意なり、くゝりろめとは、世俗にしほりろめといふに同じ

○みしよ

新古今集に云みしよつき植し山田にひたはへて又袖ぬらす秋は來にけり○みしよとは、水澁なり

し 之 部

○しりくめなは

土佐日記に云今日は京のみをおもひやらるゝ、九重の門のしりくめ繩○しりくめ繩とは俗に七五三繩といふなり

○しなかつち

徒然艸に云しなかつちこそ生れつきたらめ、心はなとか賢より賢にもうつらざらん○様と形となり、しなとかちちと心とを評論したるなり所詮心に歸する義なり、佛説の三界唯一心の意に出てたり

○しをれ

十六夜日記に云昔しの人に聞かせ奉りたくて、うちしをれぬ○しをれるとは、元來草木などより出たる詞にして、字には萎と書くなり、されと此處にては、人の愁を

含みたるを形容せしものなり又草木のことをいひたるは古今集に云吹からに秋の草木のしをるればうへ山風をあらしといふらん

○しなかつち

徒然艸に云かたち心さまよき人もさねなく成ぬれば、しなかつち、かほにくさげなる人にも立まじりて○しなかつちとは字にて差降とかく日本記に云大夫以上各の差降あり、差は次第なり區別なり、降は登降の降なり

○しふく

更科日記に云さてもこゝろみよと云ふ人々ありて、しふくに出したてらる○しふくとは喜とはぬさまにて、俗に氣のりのせぬといふに同じ

○しかく

徒然艸に云しかくゝの事はあなかしこわのためいひなることろなどいへるこそ○しかしかとは、日本記に云々とかきて、しかくゝとよめり、河海抄にいろくゝのいひことといふ義なり、史記汲黯傳に、上の曰く、吾れ云々せんぞ欲す、とあり、又然々とかきて、しかくゝとよむこともあり、是れは此の如し此の如しの義なり

○しつく

古今集に云水のおもにしつく花の色さやかにも君かみかけのねもほゆるかな○しつくとはしつひの轉語なり、こゝにては、影の映りたるを、沈むやうに見ゆるを形容

ずるなり

○しれたる

徒然艸に云しれたる女房ども、わかき男たちのまいらるゝことに、郭公やさし給へると問て、心見られけるに○しれたるとは、されたるなり、しれものなといへり

○しつのをたまき

古今集に云古へのしつのをたまき卑きもよきも盛はありしものなり○しつのをたまきとは、倭文布を織る料のへるをいふ、字には字環ともかけり

○しへたくる

徒然艸に云すへて人をくるしめ、物をしへたくる事、いやしき民の志をもうはふへからす○しへたくるとは、せむるの心なり、冤の字なり無實の罪を蒙りていひくらきぬさるを冤々といふ、又虐の字を、せたくるとよめり

○しでのたきさ

古今集に云幾ろはく田をつくれはか郭公してのたをさをあさなよふ、又蜻蛉日記に云忍ひぬや君もなくらんかひもなきしてのたをさに心通は、○してのたをさとは、郭公の異名なり、死天の山より来るよし云ひならへり、又賤の田長と云ふ説もあり、又萩原元克云、してとは、したり穂の田といふ意、たをさとは、田わさなるへしといへり

○しよく

紫式部日記に云四位少將などを呼ひて、しよくさへせて、人々を見る○しよくとは、紙燭とかく、しよくの、しよを、反切法にて約すれば、そとなる、故にそくといふなり

○しもと

徒然艸に云犯人をしもとにてうつ時は、拷器によせてゆひつくるなり○しもとは、刑杖の小なるものなり、和名抄に云唐令に云笞、音知、和名之毛度、大頭二分、小頭一分半、又云杖、音仗、和名都惠、皆節目を削り去る、長さ三尺五寸許り

○しはたる

枕艸紙に云賊にたゝ見る人たにしはたるゝに、落し入れて、たゝよひありく男は、目もあやにあさまし○しはたるとは、心の弱り、元氣のなきを、形容したる詞なり、もとは、沙人どもの沙垂るゝより出たることばならん

○しのぶくさ

古今集に云君忍ふ草にやつるゝ故郷はまつ虫のねそかなしかりける○しのぶくさは、和名抄に、垣衣、和名之乃布久佐とあるものにて、古き軒端などに、長さ四五寸許りにて、蘭の葉に似て、葉の裏に茶褐色の星ある草なり、俗に饅頭蘭といふ、竹の皮に饅頭を並へたるよふなればなり、然るに、しのぶくさといへば、或は夏月

◎國文學資料(し)之部

人家の軒に釣りかける齒菜の一種なる、しのふといふものと思入るものあり、大ひなる誤りといふへし

○しらすしもあらし

徒然艸に云人の物をとひたるに、しらすしもあらし、有のま、にいはんはおこがましとにや○しらすしもあらすとは、しらすとふにはあらしといふ義なり

○しろきもの

枕艸紙に云とねりか顔のきぬもあられ、白きものゆまつかぬ處は、まことに黒き庭に、雪のむら消わたる心地して○しろきものとは、白粉にして、俗にれしろいといふ

○しからみ

古今集に云山川に風のかけたるしからみは流れもあへぬ紅葉なりけり○しからみとは、堤又は岸などを、流れ打つ水のために、崩させましとて、杭を打ち、竹又は木を以て、戻といふものを、からみつくるなり、所によりては、戻(もち)をふるともいへりと、是れ古への、しからみなり、しからみの、しとは、水の義なり、水をからみとめるの義なり、又水をしといふ例證は、しとる、しめる、しめじめ、しづく、などいふ、しは皆水をいへるなり

○しもつけ

古今集物名に云植てみる君たにしらぬ花の名を我しもつけんことのあやしき○しもつけとは、花艸の名なり、木下野、艸下野とて二種あり、下野の國に多きくさなれば、此名つきたりともいへり

○しるしはのち

枕艸紙に云これをかたみと思ふ都には葉かへやしつるしるしはの袖○しるしはのそとは、椎の皮にて染たる衣にして、喪服をいふなり

○しほひしほみち

伊勢物語に云岩まより生るみるめしつれなくはしほひしほみちかひもわりなん、又万葉集に云あらの海しほひしほみち時はあれといつれの時かわかこひさらん○しほひしほみちとは、潮の満干なり、鈴屋翁の説に、伊勢物語の歌は、とにもかくにもの意と聞ゆと、以て参考とするに足らんか

○した、か

源氏帚木卷に云まいて君達の御爲には、さしもはかくしくした、かなる、御うしるみは、何にかはせさせ給ん○此詞は、俗にしつかりとしたといふに同じ、たしかなる意なり

○しのぶ

續後拾遺集に云百しよやふるも軒端の忍ふにも猶餘りある昔なりけり、又古今集序

に云松蟲の音に友をしのひ○しのふとは、昔になりし事や、又遠く隔たりたる、と
ころの事などを、思ふの義なり、字の本義にはあらず

○しとろ

古今集に云朝寝髪乱れてこひろしとろなる逢ふよしもかなもとゆひにせん、又千載
集に云ふみしたき朝ゆく鹿や過ぬらんしとろにみゆる野ちの荻葎○しとろとは、纏
まらす乱るゝさまをいふなり

○しち

枕艸紙に云蘇枋のしたすたれ、匂ひいと清けなるしちにたちたるこそめてたけれ○
しちとは字には楊どかきて、車をたつる時、轆をのせる臺なり

○しもとゆふ

古今集に云しもとゆふ葛城山に逢雪のまなく時なくれもはゆる哉○しもとゆふとは
葛城の葛にかゝる冠辭にして、かつらを以て、枝木を給ひ束ぬるの義なり、しもと
ゆふは、薪にすへさ爪木をいふなり、筈(しもと)と其義別なり

○しぎのはねがき

古今集に云曉のしぎの羽かきもゝはかき君かこぬよは我ろかすかく○しぎのはねか
きとは、鴨の羽の使ひさまをいふなり、鴨は他の鳥とちかひ、羽をしげく使ひて、
驚くへく、怪しむへさ音を立つるものなり、故に百羽掻ともいへり

○しうねき

枕艸紙に云あすも御暇のひまには、ものせさせ給へなど、云ひつゝ、いとしうねき
御物怪に侍るゆゑを、たゆませたまはざらんなん、よく侍る○しうねきとは、執念
の字音を活用して詞となしたるものなり

○しと

紫式部日記に云わはれ此宮のねんしとに濡るゝは、嬉敷ことかな○しとゝは、若宮
の尿をいふ、ゆはりなり

○しと

更科日記に云むかはき杯を打ちしきて、上に薙を敷て、いとほかなくて夜を明かす、
頭もしとゝに露れく○しとゝとは、しとるといふ語を、打ち返していへるにて、ひ
たとぬるゝことをいふ、しとは水にして、しめる、しゆみるのしなり

○したみ

拾遺集物名に云東にて養はれたる人の子はしたたみてころものはいひけれ、又山家
集に云鶯は田舎の谷の巢なれともだみたる聲は鳴ぬなりけり○此だみとは、折回(を
りだみ)の回の意にして、直からぬをいふなり、田舎詞のなまりをいふ、但し、し
たゝみといふものゝあるによりて、夫にかけてよめる歌なり、したゝみとは、和名
抄に、小麻子、貌甲麻に似て而して細小、口に白玉の蓋あるものなり、和名、之太

々美とあるなり

○しぞく

土佐日記に云かくいひて、なかつゝくる間に、ゆくりなくかせ吹きてこげともく、しぞきにしぞきて○しぞくとは、退くの畧言なり

○しくれのさとかまくらせは

紫式部日記に云しくれのさとかまくらせは、使も急く○しくれとは、時雨なり、さどは、颯とかきて、時雨の降る形容詞なり、かきとは、語勢を強くするの助辭なり、くらせはとは、雨の降りくらすの義なりとす

○しめ

万葉集に云わすよりは若菜つまんとしめし野に昨日もけふも雪はふりつゝ、又新古今集に云子日してしめつるのへの姫小松引かてや千世のかけをまたまし○しめとは、標どかけり、標はしるしなり、こゝをど、しるしきめれくの意なり

○しけいと

金葉集に云我こひはしつものしけ糸すちよわみたぬまは多くゝる人はなし○しけいと、は、絹のしけいとをいふなり

○しゝかみたるかみ

枕艸紙に云かみわしき人の、白き綾の絹さたる、しゝかみたる髪に、萎つけたる○

しゝかみたるかみとは、俗にちゝれ毛といへり

○しをに

古今集物名に云ふりはへていさふる里の花みんとしをにほひる移ろひにける○しをにとは、紫苑の字音にして、んをにとかへたるなり、にはんの本音なれば、此例甚た多し、紫苑は秋草にして、丈け四五尺になり、葉は枇杷に似て薄く、花は聚傘にして、紫色單瓣、菊の如し

○しかすか

後拾遺集に云思ふ人ありとなけれど古郷はしかすかにころこひしかりけれ、又新古今集に云風ませに雪は降つゝしかすかに霞棚引春は來にけり○しかすかとは、さすかといふと同意なりとす

○したりかは

枕艸紙に云いつしかしたりかはにもきこぬ○したりかはとは、自慢らしく、時を得かはなるをいふなり

○しろたへ

新古今集に云春過て夏きたるらし白妙の衣はしたり天のかく山○しろたへとは、只白しといふことなり、元は木の名にして、字には栲とかきて、柴皮を以て紙に製するものなり、之を晒すとさは純白となる、故に白栲(しろたへ)といふなり

○しるべ

古今集に云白浪のあとなきかたにゆく舟も風うたよりのしるべなりける○しるべとは、道の案内することをいふなり

○しりうご

枕艸紙に云なにかししりうごにはさこねんなどのたまふかをかし○しりうごとは、後言とかきて、俗に陰言をいふといふに同じ

○しのめ

古今集に云夏のよのふすかどすれば時鳥なく一聲にあくる東雲○此東雲とは、俗にはのくわけといふ意なり

○しはふき

枕艸紙に云三つはかりなるちこのねをひれて、うちしはふきたるけはひも、うつくし○しはふきとは、字には咳とかきて、俗にせきをするといふに同じ

○しき

古今集に云わか宿は雪降しきて道もなしふみわけてどふ人しなれば○しきとは、降り頻るとかきて、ふりしきるをいふ

○しのぶもぢずり

古今集に云陸奥のしのぶもぢずりたれゆゑにみたれろめにしわれならなくに○しの

ぶもぢずりとは、東遊記に云陸奥の國、福島の里のあたりにては、衣を染むることを知らて、石面の平らかなるに、色よき草花を並へ置き、藤布を覆ひて、圓き小石を以て、上よりすり、草花の色を布へ移し、なるへし、今もこゝより十里も遠くなる、出羽の國に近き所にては、賤民どものしかするを見しに、みやひたるものなり、忍の郡なる表の平らかなる石は、何れも古へのもしすり石ならん、實にさもあるへし

え之部

○えならぬ

徒然艸に云しはらく衣裳にたき物すとしりなから、えならぬ句ひには○えもいはれぬかうはしきにはひなり、八雲抄に云れもしろふ、ゆうなることなり

○えに

後撰集に云水鳥のはかなきあとに年をへて通ふはかりのえにこそありけれ、又同集に云深緑そめけん松のえにしわらは薄き袖にもなみはよせてん○えにとは縁の字音を轉してゐにといへるなり、錢の字音をせにといふに同じ、或人云古昔はん音なし、んはに音の軽く斜めなるものなり、故に假名に於ては、にん相似てん軽く、片假名に於ては、ニン相似てん輕しと、此説の如くなれば、えには正音にして、せんを音とす、又前水鳥の歌のえには、江にかよひ、後深緑の歌のえには、枝にかよへり、

此例極めて多し

○元たもたは、に

徒然艸に云かなたの庭におはさなる柑子の木の枝もたは、になりたるか○此詞は重くして枝のたはむといふなり、讃歌、れりてみはおちろしぬへき秋萩のたもたは、にをけるしらのゆ

○元やみ

方丈記に云あくる年は立て直るへさかと思ふに、剩へ元やみ打添ひて、○元やみは、字にて疫病とかきて、俗に熱病といふが如し

○元じて

枕艸紙に云人もさはよかんなりと元じて、かいくみてふしぬるのち○元じてとは、怨の字の音を約したるなり

○元んたう

枕艸紙に云檳榔毛の車などは、門小さければ、障はりて得入らねば、例の元んたう敷きて、れる、○元んたうとは、筵道とかき、俗にしきむしるなり

○元もいはず

更科日記に云よこはしりの關の傍に岩つはといふ所あり、元もいはず、大なる石のよはうなる中に、穴のあきたる○元もいはずとは、いひやうもなきといふ義なり

ひ之部

○ひとやりならぬ

十六夜日記に云ことにふれて、心細くかなしけれど、人やりならぬみちなれば○此詞は他人より催はしてすることならず、我どわが心より思ひ立ちてするの意なり

○ひたらけ

紫式部日記に云又なきてひたらけて、さまよひさし出つへきう、又源氏須磨巻に云ひたらけたる○是れは取締りなく、俗にばつとじたるといふに同じ

○ひとより

紫式部日記に云僧も俗もいまひとよりとよみて、ぬかをつく○ひとよとは、俗に今一と勉強といふか如し

○ひしりめ

徒然艸に云わか手もとをよく見て、こゝなるひしりめをすくにはしけは、たてたるいし必あたる○ひしりめとは、ひすみなり

○ひとたのめ

古今集に云かつこねて別れもゆくか逢坂は人たのめなる名にころありけれ○ひとたのめとは、人にたのましむるをいふなり

○ひとの國

◎國文學資料 ○ひ之部

徒然艸に云かくからきめにあひたらん人、ねたく口おしと思はさらんや、人の國にかゝるならひ有なりと○ひとの國とは、異國なり、我國に對し人國といふなり

○ひもはつし

徒然艸に云思ふ所なくわらひの、しり、ことはおほくゑほうしゆかみ、ひもはつしはきたかくかへけて○ひもはつしとは、俗にれいとけひろけなり

○ひたすら

後撰集に云ひたすらにいとひはてぬるものなれば芳野の山に行くへしられし、又千載集に云ひたすらに恨みしもせしさきの世にあふまでこそは契らさりけめ○ひたすらとは、一向どかきて一途の意なり

○ひこはえ

新古今集に云荒小田のころのふる根のふるよもき今は春へとひこはへにける、又堀川次郎百首に云見渡せば山田のひつちひこはえてははに出る程になりける哉○ひこはえとは、菓の字をかけり、艸木のさきかふより出る芽をいふなり

○ひきしろひて

徒然艸に云物もさあへず、いたきもちひきしろひてにくる、かいとりすかたのうしろ手もたひたるはそはさのほとれかしくつきし○ひきしろひてとは、さるものなど、さるまもなく、ひきつりもてゆくなり

○ひねもす

土佐日記に云今日浪なたちそと、人々ひねもすに祈るしありて、風浪たす○ひねもすとは、終日どかく、満一日の意なり

○ひとあろく

源氏帚木巻に云雪を打はらひつゝまかで、なまひとわろく、つめくはるれと○此ひとわろくとは、はしたる体にて、之を俗に、さまがわるいといふに同し

○ひげこ

枕艸紙に云ひげこのをかしう染めたるを、五葉の枝につけたる○ひげことは、竹をもて製したる籠にて、尋常の籠とちかひ、口を結ひとめす、竹の端を長く餘したる者なり、其餘りたる端のひろごりたるを鬚に見なして名つけしものなり

○ひぢ

躬恒集に云春ふかみ枝さしひちて神なひの川へにたてるやま吹のはな、又古今集に云袖ひちてひすひし水のこはれるを春立けふの風やとくらん○これらの、ひぢとは、濡の字にあたりて、ぬるゝの古訓なりとす

○ひろきもちひ

枕艸紙に云くたもの、ひろきもちひなどを、ものに取り入れてとらせたるに○ひろきもちひとは、今の世に、のし餅といふものなり

○ひとりのおらは

枕艸紙に云ひとりのおらは、小忌の公達もいとなまめかし○ひとりのおらはとは、五節の舞姫のまゐる時、薫爐をとる童子をいふ

○ひがくし

方丈記に云今日野山の奥に跡を隠して後、南に假りのひがくしをさし出して○ひかくしとは、日陰をかきて、俗に日よけといふなり

○ひめかき

方丈記に云庵の北に少地をしめ、あはらなる姫垣を圍ひて園とす○ひめかきとは、小籠をいふ、總て物に姫といふことは、多くは細小の義に云へり、姫百合、姫野老などいふ類なり、潜夫云漢土にて城上の短牆を女牆といふ乃ち姫垣の出處とす、唐詩に云淮水東邊舊時の月、夜深て復女牆を過さ來る

○ひさし

枕艸紙に云二月十日の日の、うら／＼と長閑に照り渡るに、わたの、西のひさしにて、うへの笛吹かせ給ふ○ひさしとは、こゝにては廂の字の意にして、妻屋をいふ、妻屋とは、本殿に對せし名にて、本殿の脇なる座敷をいふ、但し處によりては庇の字の意に用ひて、軒のことゝなれり、是れ前後の文意により、彼是の別を知るへし

○ひねりむく

枕艸紙に云三尺の戸帳の前に居たれば、とぞまに捨りむきて、いと細うにはやかなる、獨鈷をとらせて、を／＼とめうらふとて讀む、陀羅尼もいと尊とし○ひねりむくとは、捨り向くにて顔を振り向くといふなり

○ひさげの糸

枕艸紙に云ものまゐる程にや、はしかひなどの取交て、なりたるひさげの糸のたふれ伏すも、耳こそと／＼まれ○ひさげの糸とは、提柄をかきて、俗に銚子といふもの柄なり

○ひまやりに

枕艸紙に云紙のはしをひまやりにて、か／＼せ給へるもいとめてたし○ひまやりにとは、ひま破りての義なり、破れをやれといふに同じ

○ひざわらへ

後撰集に云万代と契りしことの徒らに人わらへにもなりぬへさかな○人わらへとは、人わらはせなり、はせの二字を反切にて約すればへとなるなり

○ひつき

拾遺集に云と、こはる時もわらしな近江なるれもの、濱のあまのひつきは、又同集に云朝またささりふの岡に立さしは千代のひつきの始めなりけり○ひつきとは、日次とかきて、貢租をいふ、みつさといふも同じ

○ひませ

十六夜日記に云わかくしきわらはやみにや、日ませにおこる事、二たびになりぬ
○ひませとは、俗に一日ねさといふに同じ

○ひたおもて

紫式部日記に云殿上人のひたおもてにさしむかひ、しらくさぬはかりそかし○ひ
たおもてとは、甚面どかきて、見る人夥たしきをいふなり

○ひねり出し

土佐日記に云聞く人の思へるやうなを、たことなると、密に云ふへし、船君の辛
くひねり出して○ひねり出しとは、やうくにして歌をよむといふか如し

○ひたふる

伊勢物語に云みよしの、たのひのかりもひたふるに君かかたにうよるとなくなる○
ひたふるとは、日本紀に、永の字を當てたり、ひたとは頼なり、俗にひたものとい
ふこれなり、ふるとは、荒ふる、千速ふる、などのふると同じく、形容の詞なり

○ひとしは

住吉物語に云姫君は今しは句ひ加りて、光るなどは、これを申すにやどろみぬ給
ひける○ひとしはとは、一入ともかけり、しはといふは、李唐の世の方言のうつり
たるものかと、夜航詩語に見へたるは、さもあるへし、今其要を摘まんに曰く、全

唐詩話に云關中の人、好を謂ふて塩となす、故に施肩吾か詩に曰、顛狂の楚客歌雪
と成り、媚嫵の吳姬笑是れ塩、蓋し當時の語なりとあり、又范成大か詩に曰、學業
は呻俚に荒み、歡惊は笑塩を隔つ、と云へるは、肩吾の詩によりて、佳人に疎濶な
るをいへるなり、又歌曲を鹽と稱す、隋の曲に、昔々鹽、疎勒鹽あり、唐の曲に、
突厥鹽、阿鵲鹽あり、此外なは多し、丹鉛録に歌詩之を鹽と謂ふものは、吟行歌曲
の類の如し、といへり、是れも音調の味はひを鹽合といふ義にして、呼ひならはし
たるなるへし、といへり、現に此説の如く我國にて、一としは、やしは、よさしは
などいふは皆李唐の鹽といふ流行方言のうつりて、いひ初めたるなるへし

○ひしかす

枕艸紙に云さらくしきなどとは、おとしもたしひしかすかし○ひしかすとは、つ
ぶさぬといふ意なり

○ひんなし

更科日記に云隨身たつものを、こせて、花みにゆくと、きみをみるかな、といは
せられたは、かゝるほどの事は、こたへぬもひんなしなどあれば、ひんなしとは、便
無どかきて、俗に不都合といふか如きなり

○ひまけ

枕艸紙に云御燈褌うちねきて、御火をけ計りまゐりたり○ひまけとは、今俗にいふ、

◎随文事類考のひま部

ひ鉢とす

○ひさま

古今集に云くるとあくとめかれぬものを梅の花いつのひとまにうつろひぬらん○ひとまとは、字にて人間とかきて、人の見ぬ間といふ意なり

○ひたひにてをあて

土佐日記に云みな人々、女をさなきもの、ひたひにてをあて、よろこぶこと、一つなし○ひたひにてをあてとは、額に手を合せて神を拜むさまをいふなり、潜夫云、宋史、司馬光の傳に、手を以て額に加ふとあり、是れは光か再び用ひらるゝを見て、人々手を額にあて、此人なればと、心服満足せしをいふ、本項の意もこゝにあらんか

○ひとりこつ

更科日記に云其時帝の御むすめ、いみしうかしつかれ給ふ、唯一人みすの際に立出て給ひて、柱によりかゝりて御らんするに、此男のかくひとりこつを、いとあはれに○ひとりこつとは、ひとりこゝといふ体言を、こつと用言にはたらかしたるものと知るへし

○ひとく

古今集俳諧歌に云梅の花見にころとつれ鶯のひとく〜と云ひこもさる○ひとく

くとは、鶯の群れの中に、俗にとびなきと云ふあり、その聲、ひとく〜と聞ゆ、是れを、人來〜とさゝなして、夫れにかけて、よみしなり

○ひちをりたるらう

枕艸紙に云銚子、中盤、圓座、ひちをりたるらう○ひちをりたるらうとは、肘折廊にて、折れ曲りたる廊下をいふなり

○ひとり

宇津穂物語菊宴卷に云われ獨り鶴と松とをみるよりもひとり〜は君にとり思ふ、又竹取物語に云此の人々の年月をへて、かうのみいましつゝ、のたもふ事を思ひさためて、ひとりひとりにあひ給へや、又古今集に云思ひとちひとり〜に戀死なは○此ひとり〜とは、大勢の人のやうなれども、皆只一人のことをいへるなり

○ひざり

古今六帖に云たきもの、籠の下烟ふすふともわれ獨りをはしらすへしやは○ひとりとは、火取りとかきて、類聚要抄に、火取りは籠木もて造り、蒔繪して蓋し、上には中にかねを心にいれて、糸金の網を造りかけたる者どあり

○ひたえのひさこ

更科日記に云などやくるしき目をみるらん、わか國に七つ三つ作りすゑたる、酒壺にさし渡したる、ひたえのひさこの、南風ふけは北に靡き○ひたえのひさことは

俗に瓢箪といふ者にて造りたる、水を汲む器にして、今の世の竹などにて造りたる、柄杓といふものも、もとは昔しの直(ひた)柄の瓢に代用せしものなり、ひたとは、別に柄をすげず、瓢にてつゝさせる故の名なり、とも柄といふに似たり

○ひた

更科日記に云西は雙の岡の松風、いと耳近う心細く聞えて、内にはいたゝきのもとまで、田といふものゝ、ひたひきならす音など、田舎の心ちして、いとをかしきに○ひたとは、引板のつゝまれる訓にして、世俗には、なることいふものなり

○ひつち

古今集に云かれる田におふるひつちのはに出ぬは世を今更にありはてぬどり○ひつちとは、元は干土にて、稻刈し後、田面に水枯れて、干たるをいふ名なれど、此歌などは、稻の刈り跡より、再び生ひ出る稻をいふなり、これを、ねろかねひともいひ、俗には處によりて、ひつてといへり

○ひせりの日

古今集に云右近の馬場のひせりの日迎ひに立てたりける車の下簾より女の顔のほのかにみぬければ○ひせりの日とは、五月五日は、左近の眞手結ひなり、六日は、右近の眞手結ひなり、此眞手結ひの日を、ひせりの日といふは、眞手番の日は、射手の近衛舍人、褐の尻を袴より前さまに引きひせりてはさむゆへに、ひせりの日といふ

なり

○ひきいれこゑ

枕艸紙に云ことなることなき男の、ひきいれ聲して、艶めたちたる○ひきいれこゑとは、かすかによしめきたるつくり聲をいふなり

○ひろめき

枕艸紙に云きはやかに起さて、ひろめきたちて、さしぬきの腰強くひきゆひ○ひろめきとは、周章(あはて)て急ぐさまをいふ、今も處によりては、ひろつくといふ方言あり、これ古言の残れるものなり

○ひらうけ

枕艸紙に云ひらうけは、のどやかにやりたる、いろきたるは、かろくしく見ゆ○ひらうけとは、車にして、椰毛の車とかけり、椰(あちまき)といふ木の葉にて飾れる車なり、此車は東帯のとき、貴人の乗るものなれば、本文の如くいへるなり

○ひとやり

古今集に云人やりの道なたなくに大かたはいさうしといひていさかへりなむ、又新古今集に云花みにど人やりならぬ野へにきて心の限りつくしつる哉○人やりとは、人にやらるゝをいふ、人やりならぬは、我からするといふ意なり

○ひとじゑ

仲哀紀に云身の長十尺をひとつゑとよめり○故につゑたらす八尺(やぶか)とよめるなり、万葉集長歌に、此月は君さませんと(中略)つゑたらすやさかの歎きなけしとも、とあり、十尺をひとつゑ、八尺をつゑたらすといふなり

○ひわりこ

枕艸紙に云よくしたるひわりこ○ひわりことは、檜破子とかきて、檜の板を割りて製したる箱を云ふ、食物をもる器なり

○ひはたや

枕艸紙に云ひはたやに、菖蒲麗はしく葺き渡したる○ひはたやのひは、檜をいふ、はたは皮の義なり、檜の皮を、粉の如く切りて、こけら屋根の如くふきたるをいふなり

○ひ、まひ

枕艸紙に云た、日一日、さるかうごををし給ふ程に○日一日とは、終日をいふなり

○ひとし

枕艸紙に云頭中將とひとしとなりな思しむさうと云ふに○ひとしとは、碁の力らの同等なるをいふ、俗に同じ手合といふ是れなり

○ひたまひ

枕艸紙に云よき處の御車、ひとたまひさつゝきて多く來るを○ひとたまひとは、副

車とかきて、乗り替の車をいふなり

も 之 部

○ものにもぬ

徒然艸に云後のわざともいとなみあへる心あはたし、日數のはやくするはどう物にもぬ○ものにもぬとは、物にたとへんかたもなさといふことなり

○ものもち

古今集に云うちわたすをちかた人にももちうす○ものもちとは、俗にものを尋ねたいといふことなり、今も古風なる人は人家をれとなふ時の詞に、ものもちといへるは、此ことばの、名残りなりとす

○ものまゐる

枕艸紙に云懸盤ともして何かはあらん、ものまゐるへし○ものまゐるとは、ものは、膳部にして、まゐるは、食するをいふなり

○もたる

更科日記に云紫生ふとさく野も、蘆荻のみたかく生ひて、馬に乗りて、弓もたるさみぬぬまで、たかく生しけりて、中をわけゆく○もたるとは、もちあふの、ちあふを、反切法にて約すれば、たとなるなり

○もたぐる

◎国文学資料 ◎い之部

枕艸紙に云またやりとむと、あらくわくるもいとにくし、少しもたくるやうにてあくるは、なりやはする〇もたぐるとは、もちわくるを約し、ちあを、たとするなりといふ、又一説に擡の字の訓にして、約したるにあらす

〇ものし

狭衣物語に云此世のものともみぬ玉はぬ男君さへ、た一人ものし玉ふを〇ものしとは、俗になにするといふに同じく、ものをあらはに、いひあらはさぬか、此頃の高貴の人の、ものいひさなれば、其ものいひのまをかけるう、物語の本意なり、さて此ものしといふ詞は、前にもいへる如く、俗になにするといふによく叶へり、たとへは、男君さへた一人生れ玉ふを、といふへき所を、男君さへ、只一人なにし玉ふと云ひて、生れ玉ふことに、いひかせたるなり、簡様の所に心をつけされは、物語をよみても、其世の人情は、知りかたき者と知るへし

〇ものから

伊勢物語に云わま雲の餘所にも人のなりゆくかさすかに目には見ゆるものから〇ものからとは、ものなからのなを省約したるなり

〇も、千鳥

古今集に云百千鳥囀るはるはものことに改されともわれそよりゆく〇此も、千鳥には種々の説われども取るに足らず、乃ち春なく諸鳥をいふなり

〇もかま

枕艸紙に云夏のもかまの鮮かなる〇もかまとは、帽額をかきて、御簾の上にかくる、天幕の如きものをいふ

〇もろこしのほう官

古今集に云寛平の御宇、唐のはう官にめされて、〇唐のはう官とは、遣唐使の判官なり、遣唐使とは、大使、副使、判官、主典等あり

〇もの、ひめさみ

紫式部日記に云繪にかきたるもの、姫君の心地すれば〇もの、姫君とは、物語の中などにある姫君といふことなり

〇ものかづけ

土佐日記に云郎等あまたに、物かづけたり〇ものかづけとは、字にては纏頭とかさて、種々なる品物を、褒美として、とらするなり、かづけものなどいふに同じ

〇ものくるはし

更科日記に云光源氏はかりの人は、此世にればしけるやは、意大將の宇治にかくし居る給ふへもなき世なり、あなものをくるはしや〇ものくるはしとは、物狂(ものくるはし)の轉語にして、俗に本氣でないといふ義なり

〇もちがゆのせく

〇附文學資料 〇し之類

枕艸紙に云十五日は、もちかゆの節句なる○正月十五日に行はる、節句なり、潜夫云歳首の鏡餅を切り此日に粥に入れ食ふなり、故に餅粥の節句といふ、歳首の諸禮は此日にて結了するなり、故に武家にては、鏡開きといひ主人大斧を以て餅を割し家族に付すの禮あり、自ら勇壯の遺風を存せり、今にして之れを思へば夢の如し

○ものけ

枕艸紙に云いたくわつらふ人にかゝりて、ものけてうするも、いどくるしければ○ものけとは、もの、崇りをいふ、俗につきものといふに同じ、潜夫云我國にては支那小説の遺害を受け、狐狸などか人を誑するとの説を信し、昔しは智識あるものも、之を信せり、今も愚下は之を信せり、或は石佛に小便せし祟りとか、猫を殺せし祟りとかいふの愚を見る、浩歎の至りならずや余本項に註するに當り辯して茲に及はざるへからず

○もどかし

更科日記に云おやのものへ、幸て参りなどせてやみにしも、もどかしく○もどかしくとは、戻かしくにて、思ふやうになくて、心のいらたつをいふ

○ものいひさかなく

紫式部日記に云この次に人の形を語りきこゆさせは、ものいひさかなくや侍るべき○ものいひさかなくとは、俗に口か悪るいといふ義なり

○もや

枕艸紙に云もやは鬼ありとて、皆へだて出して○もやは、寢殿とかきて、妻屋に對せる、本殿をいふなり

○もどくたちゆく

古今集に云さゝのはに降りつむ雪のうれを重みもどくたちゆくわか盛りはも○もどくたちゆくとは、もとの傾むくを我年のかたふくにかけてよめり

○もすのくさくさ

万葉集に云春されはもすの草くさみねねとも我はみやらん君かあたりは、又千載集に云たれこめしのへの道芝夏深しいつくなるらんもすの草くさ○もすのくさくさとは、賄一名鶴、和名毛受、草くさは、顯昭の説に、草くさりなりといへり、古事記に、血手股より漏出くさくさあり、くさは、くさりの古言なることを證するにたらん

○ものふかき

風雅集に云霞あへすなは降雪に空とちて春もの深き埋火の本、又源氏夕顔集に云もの深くたもさ方はおくれて○ものふかきとは、表へあらはれず、奥にこもりあるをいふ

○もの、あざし

◎國文學資料 ○もとの部

方丈記に云た、ことにあらず、さるへきものゝさとしかなと疑ひ侍りし〇ものゝ

せ之部

〇せと

山家集に云淡路かたいろわの千とりこゑしけしせとのしほかせさぬまざるよは〇万葉集には湍門、追門とかけり、海の狭まりたる所をいふなり、又農家などにて、裏口の方を、せといふ、背戸とかけり、是れは全く別意なり

〇せざり

六帖に云立田川瀧のせざりにはらへつゝ祝ふ心は君か爲めとぞ、又堀川太郎百首に云底清み流れたぬせぬ佐保川のせざりの浪や万代のかす〇せざりとは、瀬切りとかきて瀬を横さる浪をいふといふ説われど、瀧のせざりともいへは、きりは、たきりの約にして、瀬たざりといふの意なるへし

〇せうろこ

古今集に云やよひはかりに、物のたうびける人の許に、又人罷りてせうそこと聞て〇せうろことは、字には消息とかきて、音信のことにも、亦文のことにもいへり

〇せうと

十六夜日記に云此せうとのため、かの君も、同じ様に東なさなどかきて〇せうと

いは、兄といふ事なり、名義には兄人(せうと)なり、古へは、兄妹をも、いもせといふし事は、狭衣物語に云、御門東宮も、二ついもせとねほしめしたるに、是れ全く兄と妹とのなかをいへるなり、故に兄をせうと、いひ、妹をいもうと、相對していへり、後世に、いもせといふは、只夫婦のみなれど、古へは夫婦をも兄妹をも、皆いもせといひしなり、せうとは兄人(せいと)の音便より、なめらかになりたるなり

〇せと

古今集に云わかせこか衣の裾を吹返しうら珍らしき秋の初風〇せことは、字にて脊子とかきて、我夫をいふなり

〇せんぞくれう

枕卿紙に云かゝる雨にのほり侍らは、足形つきて、いと不便にきたなけになりはへりなんと云へは、なぞせんぞくれうにころはならめと云ふを〇せんぞくれうとは、鹿褥料とかけり、毛席をいふなり、それを洗足料の意にかけたるなり

〇せに

後撰集に云水もせにうきたる時は柵の内のもも見ぬ紅葉々、又千載集に云吹風をなころの關と思へ共道もせに散山櫻哉〇せにとは、狭所の意なり、道もせにといは、道も狭さほとにといふ意とす

○せめぎ

古今集に云老ぬとてなどか我身をせめきけん老すはけふにわはましものか○せめぎとは、争ふ様の意にして、こゝにては、身をもかくやうの義なり、潜夫云せめぐとは関の字をかく、詩に兄弟牆に関けとも外侮を禦くに足らん、乃ち兄弟相争ふをいふ、本項は全く本義にあらず、一種の詞を見て可なり

○せにかはりゆく

古今集に云飛鳥川淵にもあらぬ我宿もせにかはりゆくものゝるありける○せにかはりゆくとは、鏡にかはりゆくといふを、瀬の字にかけたるなり

○せんざい

枕艸紙に云つねにまうのほらせ給ふ、おまへはつはなれば、せんざいなとうる○せんざいとは、字には前裁とかきて、茲にては草木をいふ、處によりては、花壇のことにもいへるあり、其心得なかるへからず

○せめて

十六夜日記に云あつまのかめの鏡にうつさんは、くもらぬかけもやあらはるゝと、せめて思ひあまりて、万のはかりをわすれ、又古今集に云いとせめ戀しき時、ぬはたまの夜の衣をかへしてそぬる○せめてとは、せまりてといふ意にて、物の逼迫する義なり

○せみこま

枕艸紙に云獨鈿や、珠數など持たせて、せみ聲絞り出し、よみ居たれど、いさゝかさりけもなく○せみ聲とは、迫聲の意なり

す之部

○すこしかつ

徒然艸に云けには少かこのかたもわれとひとしからさらん人は○すこしかつとは、いさゝかやくとすこしいひあらそふ義なり、されとも心底のこらぬ友にてはなきなり

○すさめ

後撰集に云鳴聲わかみ人のすさめぬ、又古今集に云大荒木の森のした草老ぬれば駒もすさめすかる人もなし○此詞は俗に、かまわぬといふか如し、口すさみを、口遊ひとかく如く、心にもふかく入れず、口なくさみにするを、くちすさみといひ、手なくさみを、手すさみといふ、此詞は、ぬすと置きたれば、其反對にて、かまはぬといふ意になれるなり、此詞のめの字は、みども、ひども、なるも、意義にかわることなし

○すへりつ

徒然艸に云女も夜ふくるほどにすへりつ、鏡取てかはなとつくりひ出ることそれかじけれ○すへりつとは、奥に入事なり、今も御前より女の局へおるゝを、すへる

○國文學資料 ○す之部

とらふ

○すうこ

枕艸紙に云黒き袴のすうこなる○すうことは、とりけしに、裾の方を濃く染めたる袴をいふ

○ずんのくる

住吉物語に云杯のずんのくるを、大將はねぢ給へを○ずんのくるとは、巡の來るにて、巡杯のわか前に巡らんことを恐るゝをいふなり、潜夫云是れは、順次の順の字に當れり、じゆんのじゆの反切約すとなる乃ち是れなり

○すへつむはな

古今集に云人しれす思へはくるし紅の末つむ花のいろにいてなん○すへつむはなとは、べにの花にて、末より少しつゝ摘むゆへ、別名となりしなり

○すくみたるきぬ

紫式部日記に云すくみたるきぬもと、ねりやり、厚肥わたる着重ねて○すくみたるきぬとは、皺(しは)になりたる衣をいふなり

○すし

枕艸紙に云九月九日の菊を、綾とすしし綿につゝみて、參らせたる○すしとは、字には生絹とかきて、俗にきぬとらふ

○すまじ

更科日記に云冬の夜の月は、昔よりすまじき物の例に、ひかれて侍りけるに○すまじとは、荒涼など文字にはかきて、ぞつと身にしむの意なり

○するすみ

徒然社に云世を捨てたる人の、万つにするすみなるか○するすみとは、一物も身にたくはへぬをいふなり、白氏文集なる偶吟に云匹如(するすみ)身後何事かわらん、應に人間に向つて求むる所なかるへし、乃ち獨身のことをいふに違ふことなし

○すくよか

更科日記に云わの人からもいとすくよかに○すくよかとは、直といふに、よかといふ、形容詞をうへるものにして、色めかしき處のうすきをいふなり、すくよかといへるも、同言なり

○すひつ

方丈記に云東の垣に窓を開けて、こゝにふづくゑを出せり、枕の方にすひつあり○すひつとは、字には爐とかきて、俗に圍爐といふなり

○すくせ

住吉物語に云今一人は古き宮腹の女にておはしけるか、いかなるすくせにてか、此中納言夜なゝ通ひ給ひける○すくせとは、宿世の字音にして、俗に前世の約束と

いふに同じ

○ずわえ

枕艸紙に云二つを並へて、尾の方に細きすわえをさしよせん、尾はたらかさんを
雖と知れと云ひければ○すわえとは、若木の細く長く延ひたる枝をいふ

○すのこ

枕艸紙に云頓て仁壽殿より下りて、清涼殿の前の東のすのこより○すのことは、字
にては簀とかきで、椽のことをいふなり、潜夫云簀の本義とは違ふなり、簀は寢床
の下底及び席下のゆかをいふなり

○すゝろ

新古今集に云覺東な秋はいかなる故のあればすゝろにもものゝかなしかるらん、又大
和物語に云世にふれと戀もせぬ身の夕されはすゝろにもものゝ哀しきやなそ○すゝろ
とは、何となしにといふ、故にすゝろありきとは、なんとなしにありくをいふなり

○するか

古今集に云すかるなく秋の萩原朝立て旅ゆく人をいつとかまたん○すかるとは、字
にては、髹麤とかきて、腰のはそき蜂をいふなり、故に万葉集には、腰細のすかる
少女などよめり

○すゐはん

枕艸紙に云殿上人のもの云ひれせて、處々の御前どもに、すゐはんくはすとて機敷
のもとに馬ひさよする○すゐはんとは、乃ち水飯とかきて、水漬の飯をいふなり

○すまし

枕艸紙に云これかうしろめたさまに、をばやけ人、すましをさめなどして、たね
すいましめにやり○すましとは、ひすましとて、女官の卑しきものをいふ

○すぼきすかた

方丈記に云朝夕すぼき姿を恥て、諂ひつゝ出て入る○すぼき姿とは、俗に見すばら
しきといふに同じ

○すぢりたる

徒然艸に云年老いたる法師召し出されて、黒き穢なき身を肩ぬぎて、目も當られず、
すぢりたるを、興しみる人さへうとましくにくし○すぢりたるとは、一曲奏したる
さまの正しからざるをいふなり

○すぢりやう

枕艸紙に云すりやうの五節など、をりさりともしたうひなひ、みしらぬこと人に、
問ひさゝなどはせしと、心悪きものなり○すりやうとは、受領の字音にして、後世
大名といへるものなり

○すゝ

壬生二品集に云春日山岩根のすゝをふく風の音もすゝしき秋は來にけり、又拾玉集に云葛城や外山の裾の夕嵐すゝのしのやもこのはふくなり〇すゝとは、小竹をいふ、これ一種の竹にして、多く山中に生せり

〇するゝ
更科日記に云沼尻といふ所も、するゝと過ぎて〇するゝとは、さばりなき意なり

〇すかなく
万葉集に云心にはゆるふことなくすかの山すかなくのみやこひわたりなむ、又催馬樂に云すかの根のすかなすかなきことをわれはきく〇すかなくとは、無因據（よすかなし）の略言なり、今俗にすけなしといふに同じ

〇すりこ
更科日記に云大井川といふ渡りあり、水の世のつねならず、すりこなどをこくて、流したらんやうに、白き水早く流れたり〇すりことは、磨粉にして、米粉を煮て、乳汁に代へ、小兒にのみするものなり、今もしかいへり

〇すみなかし
古今集物名に云墨流しとは、器に水を盛り、墨を其中に流し紙をひたして染むるなり〇今も墨流しといへり、果して之をいひしなるへし

〇ずんざ
枕艸紙に云女房のずんざとも、ずのざとよりくる者共〇ずんざとは、従者の字音の轉したるものなり

〇すろのはらへ
枕艸紙に云ぬんやうとして、川原に出て、すそのはらへしたる〇すろのはらへとは、呪咀の祓とかきて、人よりのろはるゝのはらひといふ、古へは呪咀などいふことあり、鬼神宗教の迷信より起るものなり、潜夫古書を見て覺へす一笑するなり

〇すはま
紫式部日記に云すはまの邊りの水にかきませたり〇すはまとは、洲濱とかきて、俗に、嶋邊といふものなり

〇すはる
枕艸紙はしはとある條に云すはる、ひこはし、明星、長庚、流星〇すはるとは、世俗に、すまるとて、多く一處に集まる星の名なり

〇すみか
方丈記に云此主人とすみかど、無常を争ひさるさま、いは、朝顔の露に異らす〇すみかとは、住所にして、在所をありかといふに同じ、初學の人やゝもすれば住家とかくことあり、訓と音とをつづけたれば此ことばあらし

○すいがい

枕艸紙に云たてしとみ、すいがいのもとにて、雨ふりぬへしなとさこねたるも、いとにくし○すいがいは、字には、透垣とかきて、あらめなる垣をいふなり

○すまひ

枕艸紙に云さうしにうた一つかけと、殿上人に仰せられけるを、いみしうかきにくすまひまうす人々ありける○すまひとは、いたく辭退するをいふなり

○すなご

枕艸紙に云主殿司の官人とも、手毎には、さとり、すなごならず○すなごとは、砂子とかきて、まき砂をいふなり

○すみやく

詞花集に云君を我思ふ心は大原やいつしかとのみすみやくかれつゝ、又月清集に云此頃の小野の里人いとまなみ炭やく畑り山に棚引○すみやくとは、速(すみやか)働らかしたる詞にして、すみやかれといふ、いろかれといふ意なり

國文學資料終

明治三十三年八月十五日印刷
明治三十三年八月二十日發行

國文學資料與附

著述者 片岡潛夫

發行者 大塚宇三郎

大阪市南區安堂寺橋通四丁目
二百三十三番屋敷

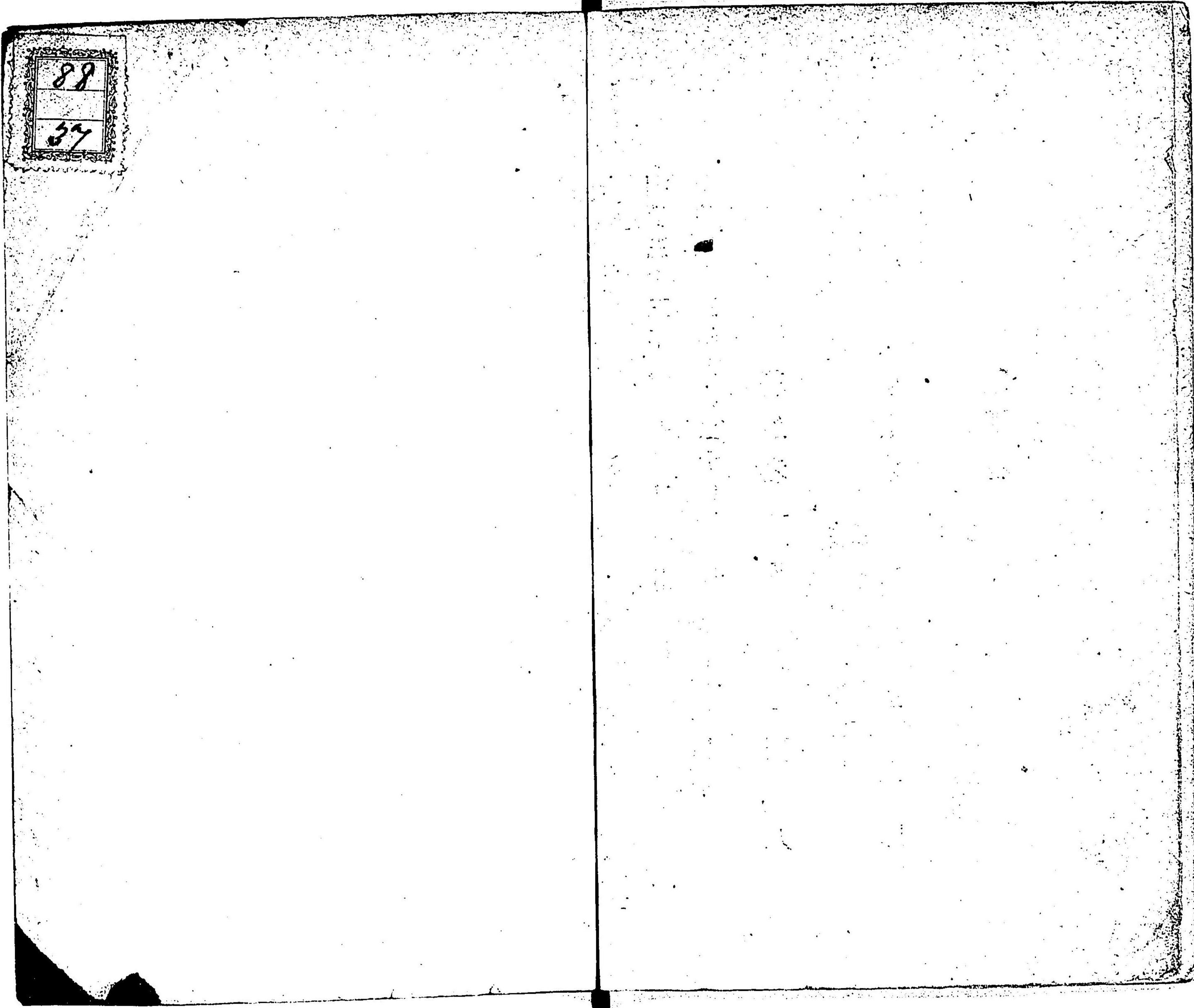
印刷者 矢野松吉

大阪市西區阿波座壹番町六十番屋敷
大阪製本印刷株式會社 代表者



賣捌所 田中宋榮堂

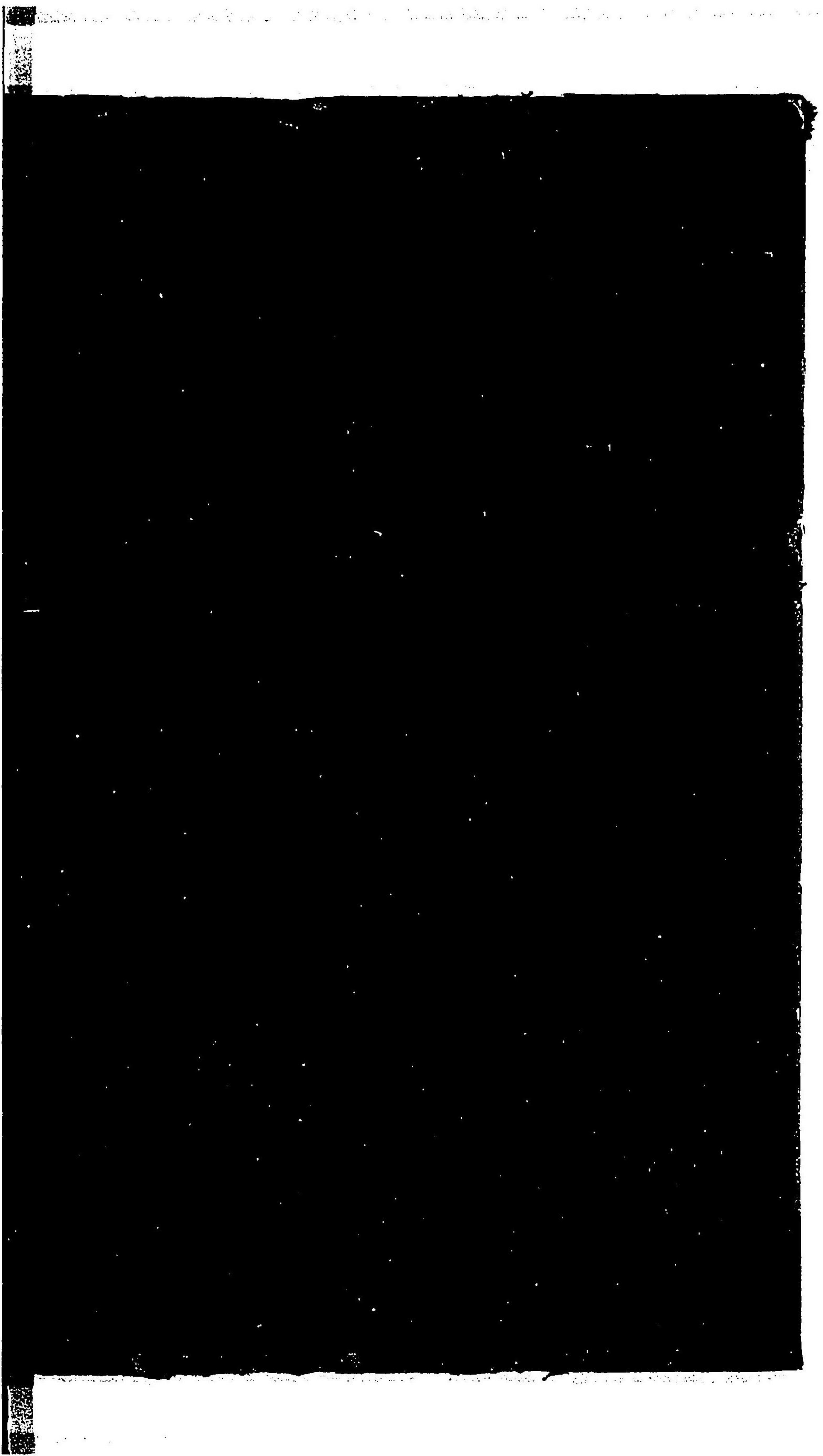
大阪市南區心齋橋通
安堂寺町南へ入西側



88
37

8.1.12

88
37



85
87

084884-000-5

88-37

国文学資料

片岡 潜夫/著

M33

DBB-0058



